



ドイツ人鍼灸師

# 鍼灸界の異端者

著者

トーマス ブラーゼイエーヴィッツ

ドイツ人鍼灸師

# 鍼灸界の異端者

著者

トーマス ブラーゼイエーヴィッツ

Text copyright

©2013

Thomas Blasejewicz

トーマス鍼灸院

〒240-0112 神奈川県

三浦郡葉山町堀内 815

Tel/Fax: 046-876-3077

妻に

## 読者の皆様へのお詫び

実は先ず何より先に皆様にお詫びしなければならない。

私の日本語は良くない。日頃子供達に怒られる程度。独学が実を結ばなかった事は一目瞭然でしょう。学会誌などにレポートなどを出す時いつも複数の人が私の駄文を懸命に直してくれるから、まるで完璧な日本語を書けるように見せかけるだ。

多少分かり難くでも、出来れば私の下手の日本語をそのまま付き合っ下されば嬉しい。他人に余りにも綺麗な日本語に直されてしまうと、私の素顔も僅かしか存在しない特色も失われるのではないかと心配せざるを得ない。出来れば我慢して読んでください。

この文章を最初から日本語で書いた。最初から日本語で考えた。先日患者に「**最初からドイツ語で書いた方が楽じゃないんですか**」と言われた。

そう言われてみればそうだね。だが、この話を聞きたいと言った人は殆ど日本人ですから、「当然」先ず日本語で考えて、相手に話を伝えようと思ったのは\*\*\*自然\*\*\*の成り行きだった。

これからドイツ語を作る予定しているが、それはどちらかと言えば、日本語の「原作」から翻訳・書き直してしまう事になる。

## 前書き

子どもの頃を思い出すと先ず静かな小さい港が浮かんでくる。葉山町の真名瀬漁港と似ていた。多数小さな漁船が海に浮かんで、所々まだ砂浜もあった。辺りは海の臭いに満ちている。残念ながら現在その海岸線はコンクリートで固められ、所々でハイテック設備が建てられた。

日当たりの良い場所で背を裏にある建物に向けている白いベンチに年寄りの漁師2-3人が杖を突いて座ってひなたぼっこをしながらおしゃべりする。漁師は皆紺色の縞



図 2: この写真は子供の頃よりずーと古いが、何となく小さい時から覚えてる「雰囲気」はこのようなもの。そこに例の年老いた漁師が日向ぼっこするのは容易に想像出来る気がする。



図 1: このようなシャツと帽子。それに黒い上着。

模様のシャツを着て、現在ファッションアイテム = **fisherman's shirt**<sup>1</sup> となっている、その上に黒い上着を羽織って、そして黒い平べたい帽子を被っていた。

故郷を考えてしまえば、先ず何より先今のような風

---

1 (写真: with permission by: [www.ernst-brendler.de](http://www.ernst-brendler.de).)

景を思い出す。海の臭いを含めて。歴史の資料を見ると出身地、つまり現在のキール市は13世紀に設立されたと私の生まれた場所は現在の港を隔てて対岸にある小さな漁村だった。

「**どうしてドイツ人がもう30年ずーと日本で鍼をやっているのか。**」とよく聞かれる質問だ。時々自分でもよく分からない。

生まれてから今日まで極普通の平凡な道のりだったと思うが、時々治療中患者に「昔は〇〇あって、だから・・・」と言った具合の話が出ると、「**それを本にまとめたら？**」と薦められる。

一端色々な回り道をしたと自分でも思ったが、今までの事を紙に書いてみると一直線にも見えるような気がする。

今までこのような話はずまらないだろうと思って躊躇したが、興味を持つ人を何かの形で喜ばせるのならたら、思い出せる限り書き留める気持ちにもなった。決して学術論文ではないので、資料集めや下調べと言った手間を殆ど省いて、「お話」として纏め、そのつもりで読んでいただきたい。

私は生まれ故郷ドイツでもそれなりの**変人 = outsider = 外人 (!)**だった。外国人と言う意味ではなく、単独行動を好む変わり者過去にそうだったし、今でも変らぬから、現在大体日陰者だ。母国にも、そして後に日本にでも似たような立場であったため、両国の間に平行線に沿った類似な事情が幾分見えて来る気がする。今考えて面白いものを並べて見ると、普段前述の平行線の内一本しか見ない人、日本人でも、ドイツ人でも同じ事、にとって話しが興味深いかもかもしれない。

青春時代にドイツ人作家 "Max Frisch" の「Mein Name sei Gantenbein」と言う本を読んでいた。私は知っている限り日

本語版がないので、ここで内容に関して一言。主人公は交通事故に遭い、入院中で暫く目が見えなかった。後に視力が回復したが、彼がその事を周囲の人々に明かさなかった。よって、全ての人は彼が盲人だと信じた。しかし、実はただサングラスを掛けて、盲人のように振舞っている青眼者だった。そして、ストーリーは周りの人が観察されていると思っていない状態で主人公がサングラスの向こうから何を見たのか。

来日してから目は見えるが、周りの人(日本人)が当然のように外国人が日本語分からないと思込んでいる事が多い。従って、私は長年日本に歩き回ってきている間、特に私の顔が知られていない場所ではまるで上記の主人公と同じ風に、「知らん顔」をしながら周りを観察できた - 悪く言えば盗み聞きした。罪の意識を持ちながら・・・面白かった。

## 急がば回れ

左記にも書いたが、自分の記憶によると今までの人生は大分蛇行した道だった気もすることがあるけれども道には変わりがない。道と言うのは町にある道よりも武道の「道」を考えたい。本文でまたそれぞれの項目に詳しく説明するが、ここでぱっと思いつく繋がりを幾つかを並べよう:

- Meister → 先生 → 模範
- Gilde → 団体 → 鍼灸師会(界)
- Handwerk → 職人 → 手の仕事

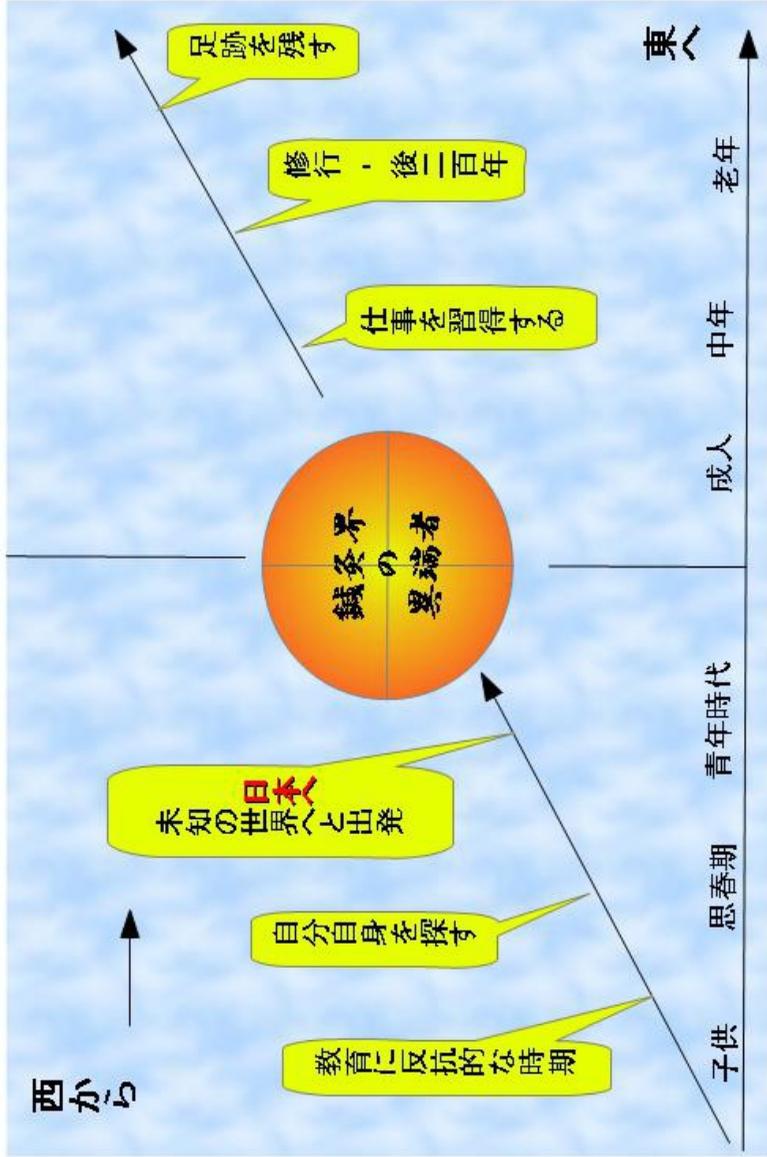
高校生まで大学で勉強しようと思ったが、軍隊の代わりにやってきた社会福祉の仕事の影響でやはり自分の手で世界

を変えたいという夢を抱いた。その「道」の入り口は「武道」だった。運命的な出会いで日本まで導かれ、ここに自分の夢に近い手の仕事＝鍼灸を見つけ、今度「医道」に進むようになった。僅かの7-8年の訓練で念願の職人になり、今日までその道を先に急いでいるようだ。これから200年ほど修業すれば何とか一人前の職人になる可能性は皆無ではないというばら色の未来を見つめている。

東洋医学に関して自分は決して特別な技術を持っている訳でもないし、特別な知識も持たない。どちらかと言うと常に独自の適当な解釈や実技でごまかし、鍼灸界に於いてもやはり一人の落ちこぼれだ。

この話は変なドイツ人が東洋に渡って、妙な人生を通じて東西の岐路(医道)に立つ事を話題にする。見方次第で私の現在の状況はいかにも辿った道の必然的な結果だろう。良かったら読者に案内しながらもう一度歩んで行きたい。

世界の東果てまで - そしてその向こう



# 目次

|                        |    |
|------------------------|----|
| 読者の皆様へのお詫び.....        | 5  |
| 前書き.....               | 6  |
| 急がば回れ.....             | 8  |
| 出発.....                | 15 |
| 教育に反抗的 - 1.....        | 15 |
| * 出来事が密集している時.....     | 15 |
| 外国まで.....              | 22 |
| 音楽との出会い.....           | 25 |
| 武術との出会い.....           | 27 |
| * 柔道.....              | 27 |
| アルバイトの出会い.....         | 29 |
| 中国の哲学.....             | 30 |
| 激動の時代.....             | 33 |
| 教育に反抗的 - 2.....        | 33 |
| * 中学校の反逆者.....         | 33 |
| 二つ目の中学校へ - 反逆者の台頭..... | 33 |
| 高校へ.....               | 37 |
| 自己啓発.....              | 42 |
| 自分を探しに出掛ける.....        | 42 |
| 知的刺激.....              | 43 |
| 競争は証にあわない.....         | 44 |
| 道・色々.....              | 45 |

|                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| 世の中に考え方は色々.....                   | 47  |
| 出発へ.....                          | 50  |
| 未だ早い.....                         | 52  |
| 高校卒業後福祉との出会い.....                 | 54  |
| 少々アルバイト.....                      | 56  |
| 作戦開始.....                         | 68  |
| 二度目の分かれ道.....                     | 75  |
| 道って不思議なものだ.....                   | 77  |
| .....                             | 79  |
| 弓道 <-> 鍼灸.....                    | 79  |
| 予定変更から.....                       | 82  |
| 今度こそ.....                         | 84  |
| 1) I had a dream .....            | 86  |
| 2) Handwerksmeister.....          | 87  |
| 触れ合い.....                         | 89  |
| 滞在2年半で結婚.....                     | 91  |
| 東洋医道へ.....                        | 94  |
| 新入生の自己紹介.....                     | 95  |
| 前から後ろへ.....                       | 96  |
| 無事に終わった.....                      | 101 |
| 仕事 - Beruf.....                   | 102 |
| 多摩川病院 - 稼業開始.....                 | 103 |
| 手術 - 難問.....                      | 107 |
| 給料と判子.....                        | 110 |
| 独立へ.....                          | 112 |
| Long and Winding Road - 開業まで..... | 114 |
| 鍼灸師 - 伝統技術の売り出し.....              | 120 |

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 珍ぶん漢ぶん.....       | 126 |
| 追伸:.....          | 131 |
| 鍼灸関連.....         | 132 |
| 情報の鎖国時代は今尚.....   | 134 |
| 外国人見学者.....       | 136 |
| 自信が乏しいのかな・・・..... | 137 |
| チャンス.....         | 139 |
| 悪い事してしまった・・・..... | 140 |
| 日陰者.....          | 141 |
| ガラ系.....          | 143 |
| 後書き.....          | 146 |

# 第1章

## 出発

### 教育に反抗的 - 1

#### \* 出来事が密集している時

序文の如く私は1956年来たドイツの軍港キールで生まれた。私も大分老いたが、来日の頃よくある程度の年配の男性にキール、軍港の事を話しかけたら「あっ、分かった」と帰って来たが、今日同じ事を言っても、あなた何を言いたいのか丸きり分からないと言わんばかりの顔される。時代の流れでしょう。

因みに、葉山に十数年住んでから鑑刷港の番人から葉山と生まれ故郷のキールが特にヨット関係で姉妹港だ。右の写真は現在キール市の中心部の航空写真。



図3: キール市の中心部の航空写真



図 4: キールの地図。近辺に多数の湖が見られる。ボイスカウトの時これらの湖は行き先だった。

### 歴史 (一部)

1233 年から 1242 年の間にシャウエンブルク=ホルシュタイン家のアドルフ 4 世により建設される。キール周辺のみがザクセン領であり、西と北はデンマーク領で、東にはスラブ系民族が住んでいた。町の中心に位置する修道院とニコライ教会はこの頃の設立。1283 年にハンザ同盟に加入するもフレンスブルクとリュエベックとに挟まれ商業都市として発展することはなかった。1329 年に町の城壁が建設されてから 16 世紀末まで町は現在の旧市街のあたりに限定される。





図 6: 奥の塔は市役所、その左手前にキールのオペラハウス

文学の初対面は小学校に上がる前の事だった。自分が未だ読めない内にお母さんが毎晩一章ずつ読んでくれた本がある。実際2巻でできている:ジム・ボタンがやってきた / ミヒャエル エンデ (著)。黒人の捨て子ジム・ボタンが機関車で10分一周出来る小さな島(眠り島)に住んでいる独身機関車運転手のルーカスの養子になって、複数の冒険に出かける。私のヒーロージム・ボタンのやる事成すことどれも普通ではなかった。お母さんがその2冊の本を最初から最後まで多分2-3回ほど読んでくれた。一人で読めるようになってから自分で後2回ほど読んだ。現代子には是非薦めたいものだ。

小学生になって最初の2-3年ほど他の子と一緒に何とか大人しくしたが、多分小学校4年生からあれこれ気に入らなく

なって、ジム・ボタンが示した脱落者の方へ滑り始めた。横文字で表現すると私は "authority problem" (権威承認障害・・・って言えるのかな)、つまり先生や上司などの指示をそのまま受け入れられない/反抗する癖がでた。

在学中の子供達が宿題を貰うのは多分世界中の何処でも同じでしょう。正確には覚えていないが、多分小学校3-4年生以来学校から家に帰ってきた時、当時のドイツではお昼頃、一つの儀式として、部屋に入った時点でカバン(ランツェル)を部屋の反対側の隅に放り投げて、外で遊ぶため



図7: 江ノ電のような路面電車は待ちの「ライルライン」でもあった。

家(アパート)から飛び出てしまった。あたりはすっかり暗くなってから、それともお母さんが窓を開けて「帰って来い！」と怒鳴った時やっと家に戻った。(その形で子供が家に呼び戻されるのは当時「普通」だった。)外遊びで泥だらけで帰ってきたら、少々綺麗にして(ドイツにお風呂がなかったし、内は貧乏だからシャワーのような高級設備もなかった)からご飯を食べて、その内宿題なんて意図的に忘れたか、最初からサボった。遊びの方が遥かに大事だった。

その構えは学校生活を通して今日現在まで続いているため、どこにでもはみ出てしまう:母国ドイツでも、新しい故郷日本でも。自分でも時々悪いなと思う。

今の子供達が朝から午後まで学校に閉じ込められ、やっ

開放されたと思ったら、今度夜遅くまで塾などと名乗っている別の監獄に入れられる。小学生を「今度遊ぼうか」と誘ってみると、カレンダーが取り出せれ、3週間先の午後15:45時にアポイントメントが取られる。今の子供はかわいそうだと思わざるを得ない。



私のカルマ《仏教》＝宿命を拍車掛けたのは8歳の時ボーイスカウトに入団したこと。(そのため人生で初めて自転車を貰った。自転車乗りが好きな事はここから始まって今まで続いている。)後に又何度出てくるが、ここもお兄さんが先に入団したから、弟(私)がどうしても真似したがるからだ。ボーイスカウトは普通道徳的な行いをし、誇りや名誉をもって振舞う。教

育的非常に宜しいし、若い子に是非お薦めしたい。しかし、私(たち)が入団したグループはボーイスカウトよりも冒険野郎団、又一時的山賊のようなものだった。

ボーイスカウトの大事な行事の一つは「旅行」。それは電車や飛行機を使って遠くへ行く意味よりも、自転車を使って、後ろに自分の荷物や組み立て式の大きなテントを一部ずつを乗せてから集団、たいてい15-20人ぐらいで家から30-40 km

圈内<sup>2</sup>のどこかでキャンプをしたりして、農家でお世話になる事をしている。お蔭様で農家の生活大分体験出来たし、農作業の手伝いでその肉体労働もタップリ味わった。

農家の原っぱでキャンプすると仲間が皆一枚ずつ運んできた台形のプレーンを結び合わせ、プレーンの数次第四角形、五角形、・・・八角形などの天井部分の開いているテントが出来た。上は開いているから中で火をたくことも出来た。暖房や料理に使えたが、料理は普段雨が降らない時テントの外でやった。



図 8: (写真: with permission by: Linder Solingen, <http://www.linder.de>)

又、ボーイスカウト全員が日本の銃砲刀剣類所持等取締法(銃刀法)違反で捕まえる筈だ。なにしろ全員我々昔 Pfadfindermesser (旅の為のナイフ)を所持した。左記の銃砲刀剣類所持等取締法の「雑則」に:

**\* 刃体の長さが 6cm をこえる刃物の携帯の禁止**

となっている。我々常に持っていたナイフの刃少なくとも 15 cm 前後だった。それは薪を切る、料理する、カンズメを開ける、木を彫る、自転車の修理・・・何にでも使って、なくてはならない必須アイテムだった。8-10 歳の子供達あれで生活したので、当然たまに手を切ったこともあるが、私の手にあるきり傷の数は内の子供達より少ないはず。

---

2 キール周辺の地図を見れば、その圏内に多数の湖がある。

今は子どもたちの安全に関して凝り性の親が顔を真っ青にして失神してしまいそう。だが、我々は当時刃物を追って極普通の事であって、万能の優れている道具だと認識した。人類の歴史を通してつい最近まで全ての文化圏で全世界では何かの刃物は人々の存亡を左右したに違いない。刃物は必ずしも「ナイフ」である必要ない: 弓矢、槍、農具、工具・・・どれでも。Game boy や iphone がその時代の終止符だを打ったと思っているかもしれないが、それは恐らく違う。子どものころに責任を持った刃物の使い方を身に付けないと、大人になって無責任なものがミサイルで遊んでしまう恐れがある。

## 外国まで

前述の自転車で可愛い遠足風の旅の他に、時々「グレート＝ジャーニー」のようなものにも出かけた。ドイツにいる間当然「海外」旅行はそう簡単に出来ないが、「外国旅行」は簡単だった。陸続きで隣国まで行って、実在しない空想の「線」＝国境を越えればいい。そういった国境は細胞膜に似ている: 二枚で出来ている。国を出る際出発する国の制服を着ている国境警備隊員にパスポートを見せて一本の線を超え、そして数十メートル先に他国の制服を着ている国境警備隊員に再びパスポートを見せてしまえばよい。現在の EU でこのような移動はなお更に簡単だ。

ボーイスカウトで外国旅行して回った国はオーストリア、イタリア、フランス、スイス、ルクセンブルグ、デンマークぐらいだった。お兄さんは更にスウェーデンやスペインにも行った。外国旅行中に誰がどこで何をしたかの大部分を親に言わなかった。内の親は理想主義に燃える教育親ではなかったにしても、遠

方の旅先に起きた出来事を全部知っていたら怒っただろう。

何しろリーダーが一人、当時 20 歳-20 半ばぐらい、と彼を少々手伝っていく数名の 18-20 歳の人が 20-30 人ほどの 8-15 歳の子ども達を他国に連れてしまうことを許す親は日本で私の周りに一人も知らない。外国に行っても自転車旅行の似た形でキャンプすることもあり、ユースホステルで泊まったり、それとも矢張りどこかの農家でお世話になる事が多かった。

私は 10 歳の時そう言った旅中で全体のグループ複数の 2-3 人組みに分かれて、ヒッチハイクしながら次の目的地まで行き、向こうで又全員合流する事もあった(一回だけではない)。出発は確かオーストリアでアルプスの北側麓、目的地はアルプスを越えて 3-400km 離れたイタリアの北部にある町。二人の 10 歳の男の子(ボーイスカウトの制服を着ると結構助かる)をヒッチハイクでそのような旅させる/旅するのを許してしまう親がいないだろう。幸い内の親知らなかった。友達の親も。

イタリアで又合流する友達の中にヒッチハイクが上手くいかなかったため、山岳地帯で速度をうんと落とした貨物列車に飛び乗って、アルプスの向こう側又飛び降りる人もいた。親が知らなくて良かったかもしれない。

目的地に着いたのは遅かったりして、決まった宿がなかったりするため、夜にまともな寝場所がなかったこともあった。仕方なく、何人がどこかの橋の下で、私と 5-6 人の友達とドアの開いた配達トラックで寝た。山岳地帯では真夏でも夜が寒い。ヒッチハイクはなるべき手軽が良いから誰も寝袋を持っていなかった。ペンギン対策しかなかった:友達同士皆なるべく体を寄せてお互いの体温で夜明けまでしのいだ。



同じ10歳の頃、それこそボーイスカウトの外国(オーストリア)旅行中に、アルコールと初対面したこともよく覚えている。例の組み立て10数人ような大きさのテントで夜火をたきながら喋ったり、歌ったりしていた。どこからだれも見なかったが、今は「浮浪者」がやってきた。髪の毛がもさもさして、夏なのに大分汚れている長いオーバーコートを着ていた。ポケットにはCinzanoと言う酒が入っていた。全員が焚き火をの周りに座り、色々とおしゃべりしながら浮浪者は持っていたあの酒を我々10数歳の若い子に勧め、ビンを円に回した。あの歳であのような酒に興味を示す子が本来どこにもいない筈だから、仲間みんなビンを受け取って、辛うじて臭いをかいて即座に隣の子に渡した。細かい事を覚えていないが、私だけは仲間全員の楽しい話から外れて、何となく黙ってあの酒を嗜んだ。一口

を飲んで又隣の子に渡し、ビンが焚き火の周りの仲間の円をグルグル回っていても、結局浮浪者と私だけが飲んだ。その内記憶も意識も消えた。

翌日その時お世話になった農家の部屋で目が覚めて、人生初めて本格的な二日酔いを体験した。それに伴う症状皆様が良くご存知のはずから、詳細はここで省く。農家の皆さんに凄く迷惑かけたことは本日まで鮮明に覚えている。無論、そのような出来事もあったよと何時かお母さんに話したのは10年後だった。

## 音楽との出会い

音楽の出会いは決して涙が出るほど素晴らしい演奏会や世界のトップクラス演奏家の録音観賞ではなかった。ボーイスカウトが何かのミーティングを終了したり、解散したり、旅行中で皆寝る前に一度全員その時に合うような歌を歌った。又、良く夜焚き火の周りに皆集まって歌を歌った。キャンプファイアーに集合して合唱する際時々誰かがギターで伴奏してくれた。このギターの伴奏こそが私を魅了したから、親にギターを習いたいと頼むことの動機になった。

最初親が非常に安いギターを買ってくれた。ギターの独奏のレッスンを受けたのではなく、マンドリンと組んでいるアンサンブルに参加した。二、三年経ってからそのアンサンブルが解散され、指揮者として勤めた先生の元で今度クラシックギターを習い始めた。

音楽の出会いはそのまでの世界観を変え、耳で情報を収集し、手で物＝音を「作る」という感覚を私の脳に植えつけた事も何かの形で現在私の東洋医学に関する考え方に影響を与えたに違いない。

ギタリストは左手で弦を押さえるから爪を短く切り、右手で弦をはじけるために爪を伸ばす。具体的に言えば、自分の掌を自分の顔に向けて指先を見ると、爪は指先の肉より約 1 mm ほど伸びるのは理想的だ。クラシックギターを弾いている人にとってこの右手の伸びた爪こそが

命だ。何かにつつかって爪がおれたら演奏が出来なくなるからだ。ギタリストの爪を「修理」する手法は又色々あるが、やはり本物が一番だ。そこで右手の爪が折れないように日常生活において右手の使い方を習慣として身に付ける。代表的なものは、右手でものを取ろうとして近寄る際、手をそのまま直接出すのではなく、飛行機が離陸か着陸するようなカーブを描きながら接近する。そうすると爪が直角でどこかにぶつかる可能性が低くなり、爪を折る危険性も大きく抑えられる。



図 9: 私の大事なギター = *Piktor* と言う名前まで付いている。そして練習のために自分で作ったシャツ。ギターに傷が付かないようにボタンなし。



図 10: 私の左手

---

治療者に是非を薦めたい習慣だ。患者の体に車が正面衝突する風よりグライダーが優しいカーブを描きながら患者に接近してから接触する事だ。

## 武術との出会い

### \* 柔道

これも 10 歳の頃だった。言うまでもないだろうが、お兄さん

は柔道を始めて、幼い私がそれをわきから見て羨ましくなり、どうしてもお兄さんの真似をしなければならなかった。つまり、余り深い意味なしで武道と出会えた。暫く稽古して、幾つかの試験を受けて、人気のある色付きベルトを貰ってから何度かの試合にも出た。何となく柔道選手として順調に成長し始めたが、自分としてはっきりと分からなかったが、どこか違和感があった。

二年後またお兄さんが先に合気道を始めた。再び弟が付いていて真似しなければならなかった。しかし、ここに幾分運命的な出会いがあった。柔道と違って合気道の場合は当然「試合」があり得ない。護身



図 II: 合気道初段の試験中

術ですので、攻撃を仕掛けてくる人は必ず負けないといけない: 競争があまりない。概念としてそちらの方が私の性に合った。概念だけではなく、動きそのものは丸で私のために考えられたようにも思えた。従って、合気道をやり初めて短時間で柔道より遥か上まる速度で上達した。競争もないし、合気道の動きは柔道よりずっと好きだったから、合気道を初めてから間も

ない内柔道を辞め、合気道の稽古に専念した。

どんどんと上達し、例のカラフルな帯を次々と獲得し、凡そ17歳でそろそろ初段を取る時期だと先生に言われた。当時ドイツの合気道連盟の決まりとして初段の試験は18歳から受けることになった。成人になると自動車免許を取得できる同じ歳。もしその段階で段の試験を受けたらドイツの凡そ15番目の有段者になれたはず。しかし、後に又詳しく説明するが、その頃ギターと武術の練習で余りにも夢中になったため、学校の成績が悪化し、危機的立場に置かれてしまった。仕方なく暫くギターと武術の練習遠慮気味にして、必死(?)勉強した。結果として辛うじて学校に残れて合気道の初段は20ぐらいで取る事になった。国内の有段者64か65番目になった。

日本では初段が大したことないが、当時のドイツでは結構な先生身分だったから、2-3グループを教えるようになった。

## アルバイトの出会い

日本と違ってドイツでは子供の頃から、子供が年齢次第出来るアルバイトをするのは普通だったが、現在どうなっているかが良く分からない。ここで「アルバイト」の表現する事かなり躊躇する。「アルバイト」はご存知のように元々ドイツ語: Arbeit。しかし、ドイツ語ではそれが「就労、労働、働く、全日制、常勤」などの意味ある。日本で使われている意味とは違う。私は大体12歳で始めたアルバイト = job (英単語から今のドイツ語国語辞典に「ドイツ語化」されている "jobben" までである) はクリーニング屋の配達だった。学校が終わってから月曜日

から金曜日まで5つ日間午後2時間の事だった。

一周間あたりの給料は15マルクで、一ヶ月60マルク。そして配達先のお客さんからチップも月に30マルク前後だったので、平均的な「収入」約一万円だが、当然あの頃の購買力は今より高かった。無論、「自分のお金」を持ったことのない子供にとってそれは大金だった。

毎日体を張って稼いだお金を少しずつ貯金し、溜まったら欲しかった物を買、「自分の〇〇」と誇りを持った(多分威張った)。親に何かを買ってもらうのも結構だが、自分は半年や一年毎日2時間働いて、やっと念願のものを**手**に入れると矢張り達成感が違う。

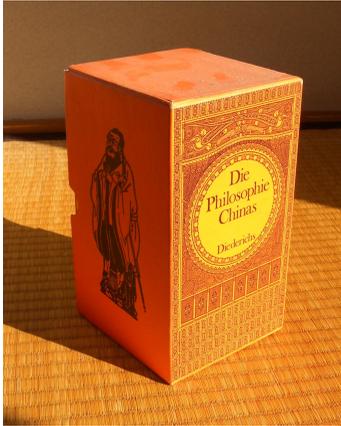
自分の力、自分の手で何かを達成する/作り上げる事に対する誇りや満足感も今日の私の仕事＝手の仕事に繋がってしまった。

## 中国の哲学

大体15歳の頃手当たり次第沢山の本を読んだ。具体的に言えば、当時生まれ故郷のキールに古本屋3-4軒があって、それらの店に凡そ2週間に一変ほど回って、面白そうな物を探した。場合によって、紐で縛った10冊が束になったバーゲン品を買った。買い込んだの文学、美術、科学・・・なんでも。ナイトテーブルに積み上げて上から順番に読破した。古本屋経由ではなかったが、その頃特別注文した本の中には現在でも大事にとってある、5冊からなる中国古代哲学(易経、老子、孔子などの作品)を前述のアルバイトで稼いだお金で自分の誕生日プレゼント(高かった!)にした。そこに遭遇した

思想の世界は思春期の真っ最中の私に大きな影響を及ぼした。

易経や老子の読書によって武術(=武道)に関する概念と東洋に関する関心が強く刺激され、恐らくこの出来事は将来の進路と今の職業=鍼灸師への道の方角付けに関与した気がする。武道→思想→医道へ。



左上:  
例の中国哲学書のセット。いつかドイツから送って貰った

右上:  
中国哲学書のセットの内「易経」を抜いて、別の箱に収め

が、長年本棚に立っただため、埃が被っている。写真撮るとき気がつかなかったが、今見るとそのままでいいと思う。

左下:

上記の5本セットに含まれている「易経」を何度使ったから幾分膨らんだから箱に入りきれなくなったし、特別大事だから、化粧品の箱に別に保管している。

た。その代わりに、もう一冊本来セットに含まれていなかった本をセットに加えた。カバーの色が違うものだ。

右下:

「易経」を使って何度 - 特別大事な時だけ! - 占ったこともある。そのために用意した下敷きと丁度いいと感じた  
→ 竹串。



## 激動の時代

### 教育に反抗的 - 2

#### \* 中学校の反逆者

引越しやその他の色々な事情があったため、卒業するまで全部5つの学校(2つの小学校、2つの中学校と1つの高校)に行き、12歳で最初の中学校に入った。学校がそんなもんだとも思ったし、何となく友達も出来て、学校生活も楽しい程ではなかったにしても、仲間と乗り越えた。まだ思春期の入り口だから反抗心が芽生え始めたばかりだった。合気道との出会いもクラシックギター(音楽)を習い始めたもこの頃だった。その最初の中学校では記述すべき反抗的行動は然程なかった。

#### 二つ目の中学校へ - 反逆者の台頭

再び引越しのため15歳頃中学校の最中他の中学校へ転校することになった。ただでさえ青春時代で頭の構造が普通ではなかったから、新しい学校に余り馴染まない事が色々な禍と繋がった。

正確の時期は覚えていないが、新聞広告に「科学入門書を差し上げる」とあった。面白そうから親を頼んで取り寄せてもらった。勿論業者が鎌を掛けた作戦だった。送った本を1-2週

間以内で返品しない限り、その本のシリーズを順番に、毎月一冊、合計30冊、を購入する契約になってしまった。一種の詐欺でしょうか。私は最初の本を読み始めて、面白かったためそのままにしてから最終的30冊買う事になってしまった。

それぞれの本は凡そA4サイズで140-150ページほどだた。一冊を読むには丁度一ヶ月掛かった。お蔭さまで2年半で30冊の科学入門書を読んでしまった。天文学、生物学、地質学、電気工学等あらゆる分野。自分は特別苦労した覚えもないし、飽きたわけでもない。結果的同年代の学校仲間より何年先までの勉強を済ませた雰囲気だった。理科の授業は顔に出ほどつまらなかった、先生に「そんなつまらない顔するのを辞めてくれないか」と言われた事があった。

他の生徒は授業に関してそんなもんだと考えたらしいが、思春期の最中に突入した私にとって反撃する義務感や使命感を感じた。先生に向かって授業の構成や内容が〇〇理由で気に入らないから変えて欲しいと言った。そのような発言を複数の先生に向かって何回もした。

ある時生物の先生が文句言われるのは頭に來たらしいから、「お前そんなに賢いなら今日の授業をお前に任せる」と言われた。少しドキッと來たが、前回の授業の続きだったから、何とかこなし。終わったら仲間の生徒から特別批判も出なかったし、先生が「分かった。じゃ、今度から授業をこのような方式で変えよう」と言ってくれた。

教頭先生は物理学を教えた。しかし、お話しの仕方は非常に単調でつまらなかったし、生徒の興味を引く実験何もしなかった。教室を見回すと授業中の殆どの生徒が遊んだり、寝

たり、またボートして窓の外を眺めた。お言葉で大変申し訳ないが、現在鍼灸関連の学会・勉強会に参加する、特に大ホールなどの会場で肩書きいっぱい持っている講師がスライドを使う(＝部屋を暗くする)際全く同じ光景を沢山見たことある。

そこで教頭先生に声を掛けて、生徒が先生の授業に全く興味を示さなくて、寝てばかりだと説明した。本来説明する必要性は全くない筈:目の前にいる生徒の行動や顔が見えるから。提案としてその時点でほぼ皆無だった科学実験(ここは物理学系なもの)を授業に取り組むように促した。次の授業の冒頭で教頭先生が「トーマスはもっと実験があったほうがいいだらうと提案したから、今日から・・・」言い出してきた。嬉しかった。それから授業中に少しずつ実験を行い、生徒の間で評判もそれなりに向上した。

問題は数学(多分例の科学入門シリーズに数学の本がなかった)や歴史、後に英語などの項目。この辺はドラえもんに出てくるのびた君と同様に何時も0点のテストばかりだった。親は学校の成績に関して然程興味がなかったから家庭内の問題にならなかつたにしても、後に余りにも成績が悪いから退学させられる危機に追い込まれたことになった。

頻繁に映画の題材にも使われる言葉がある:カンニング＝ずるさ、悪賢さ、狡猾さ。私の周りの仲間、他の生徒殆ど多かれ少なかれやっていた。数学や歴史において私にとっても必須の技術であったはず。但し、この頃段々と目覚めた自己に対するプライドに触る行為に見えた。又0点のテストになるぞと分かりきっても、仲間が何かのヒントを差し出してくれたにも拘わらず、カンニングした事ない。知っている事なら知っている、知らないことは知らない。一種の哲学か、信念と言うかが当時

台頭して、今まで殆ど100%でその信念を貫いた。自分として誇らしいが、学校で良い成績を取るには全く役に立たなかった。

2つ目の中学校の時に教育現場の常識に反する行為もした。授業の間の休憩時間が5分、10分、15分と段階的長くなった。5分の休憩時間では教室にいたりしてちょこっと校庭に出たぐらい。15分の休憩時間は何となく長く感じられ、たっぷりと休める気分だった。学校の規則として校庭から出るのは禁じられたが、友達もいなかったし、学校そのものは余り気に入らなかったから、何時も一人で学校の隣にある公園で散歩しに行った。

ある日公園から帰る際学校の門で教頭先生に止められた。校則に反していったいどこに行ったかと聞かれた。普通ならば反則した生徒に学校の罰則に則って何かの罰が課せられる。しかし、私は思春期最中の何にでも反撃ムードがあり、自分なりあの頃の概念/信念を貫いて、なぜか校庭で皆と一緒に過ごすより、一人で公園で散歩したいかを説明することで教頭先生を説得した。ありがたいことに教頭先生が最後まで私の話を聞いて：「分かった。では長い休憩時間を公園で過ごして宜しい。面倒を起こすな。」と言ってくれた。先生はいかにも寛大だったか、それとも私の話は矢張り説得力あったのかが分からないけれども、希望的観測として後者の方だと思いたい。

類似の規則から逸脱して特例扱いをもう一つをつくった。前に柔道に於ける競争よりも合気道の戦わない精神の方が私にとって遥かに魅力的であり、自分の証にあったと説明した。

学校の体育授業の一貫として時々サッカーがやる事になっている。他の生徒には結構人気のある授業であった。しかし、私は、サッカーの選手も、監督と観戦する客さんも大声で騒いだりして、攻撃的は態度をとったり、試合そのものは一つの「戦い」と言う概念に基づいて早くも中学生からサッカーが嫌いになった。それは後に又出てくる「良心的徴兵忌避者」になる事に繋がる。

この段階＝中学校は後に説明する義務教育ではないにも拘わらず、生徒が授業に参加する義務あった。しかし体育の先生にも私の考え/信念を説明で説得し得た。体育の授業はその日で最後に授業であった場合、先生の了解を得て、他の生徒がサッカーをやっているのに、私は先に帰宅した。最後に授業でなかった場合私は適当に読書などをした。議論の余地はあるかもしれないが、自分として授業をサボったのではなく、信念を貫いて生きたと考える。

## 高校へ

ここで一端当時のドイツの学校制度を説明する必要がある。

日本では小学校 - 中学校 - 高校が三段階のように続いている。最初の二段が義務教育に当たる、合計9年になる。ドイツでは小学校が義務教育だ。一年生から9年生までである。小学校9年生として卒業すれば、義務教育が完了だ。小学校の6年終了時で担任の先生と親が子どもを中学校それとも高校へ進学させるかを話し合う。子ども本人が意見や希望を表すこともあるが、矢張り「保護者」+「教育者」のセットでものが決

まる。仮に小学校6年生が高校に入るとしても、最初の半年はお試し期間になる。もし授業についていかれないならば、一段落とされる: 中学校へ送られる。小学校から中学校へ行った時も同じ。私の場合担任の先生が「こいつ頭が悪いから、高校は無理だろう」と言った助言で中学行きになってしまった。

小学校6年の時中学校や高校へ進学する際、小学校を卒業することにならない。小学校から中学校へ移って、中学校卒業は10年生だ。私は小学校から中学校へ移ったが、後半で生意気な気分で勉強が足りないと勝手に言い張り、更に高校へと進む希望した。



図 12: *Humboldt Schule* 中も hogwarts に見える。

同様の希望を抱いている生徒を町中の中学校から集めて、当時人口 27 万人の都市キールにそう言った特殊な転入生のクラスを作った高校は一軒のみだった。転入出来る時期が 2 つある: 9 年生と 10 年生 = 卒業生として。私は 9 年生で転入した。ここで注意しなければならないのは: 9 年生で中学校から離れると「卒業」していないから、その段階で結局どこの学校

も卒業していない。

高校に転入した生徒たちは当然今まで高校に匹敵する勉強しなかった。よって、最初の一年は慣らし運転のようなものだった。元々高校に行った生徒に追いつくため勉強を頑張らざるを得なかった。その後他の生徒と合流し、高校の最後の3年の間大学の類似する形式で授業を受ける。つまり、クラスはなくなり、幾つかのルールに則って「コース」(科目)を選ぶことになる。二つの専攻科目→一週間で6時間の授業、を選んで、その他は週間で3時間の副専攻になる。義務のものを取らざるを得ないが、自由に選択する科目は生徒の時間とやる気次第だ。

格好の最終3年間の成績はほぼ全て(!)最終的の成績とそれから計算される平均点数に入る。要するに、大学で人気のある科目を勉強したければ良い平均点数(ラテン語で *numerus clausus* と呼ばれているもの)が必要から、3年の間で全ての科目で頑張らないといけない。

私は最初の一年間で躓いた。高校では必ず外国語を2つ取らないといけない。英語は誰でも中学校から勉強しなければならないが、高校に入って私は何となくラテン語を習ったかったが、学校の都合で「お前(達)はフランス語だ」といわれた。それ自体気に入らなかった。英語やフランス語のそれぞれ最初の授業で担当する先生が教室に入った瞬間で「こりゃだめだ!」と確信した。先生との波長が全く合わないお蔭でこの2つの科目ですーと「のびた方式」で0点のテストをとることになった。問題は二つの項目0点ばかりをとると落第生にある:留年になった。

次の年の中間試験時も同じ成績だった。問題は:二回続けて留年できない。退学になる。だが上に説明した通り小学校も中学校にも卒業していなかったから、これは本格的な危機になった。ここで何とか頑張らないとどこの学校にも行ったことのない状況に落ちる恐れがあった。

そう言うわけでそこまで学校の勉強よりも専念した合気道のとギターの稽古を一時的保留せざるを得なくなった。嫌々と思いつつながら英語とフランス語を勉強し、年末試験で野球の「スライド」するように辛うじて合格した。最後の3年間で外国語の義務付けられた単位をとった瞬間に英語もフランス語も辞めた。

外国語は嫌で苦手だったが、国語(=ドイツ語)は好きだった。かなり沢山本を読んだと思う。中学校でも同級生より目だったらしく、先生が勝手に参考資料を持ってきてくれて「お前ならこういうものにも興味あるだろう」と言いながらそれを渡してくれた。

一番記憶に残ったのは高校の国語先生の言葉だ。背の小さいあまり愛想のよくない、60歳ぐらいの男性先生が初めての授業で:

「俺はお前達に教える事をそのまま信用して覚えるな！全部嘘だと思え。家に帰って、俺が言った事が本当かどうかを自分で調べて、他のところでも同じように出ると分かってから覚える！」

特に女性が授業中に一所懸命ノートを取って、そのメモ書きを暗記する傾向があった。あの先生も異端者/教職に対する反逆者だったから、私にとって一番印象的だったかもしれない。その先生が教えてくれた色々な事は後になって凄く役に

立った。国語の先生が披露した他の先生にあまり見られない態度は比較的最近どこかで見つけた引用文と繋がる。国語の先生はお釈迦様の事何かが知っていたかどうか分からない、次の言葉とどこかで通じる：

**Believe nothing, no matter where you read it, or who said it, no matter if I have said it, unless it agrees with your own reason and your own common sense.**

**Buddha**

「貴方の論理とコモンセンスに一致しなければ、何処で読んだとしても、誰が言ったとしても、若し私(仏陀)が言ったとしても何も信じてはいけません。」

(人の言った事を其のまま信じるのではなく自分で考えて理解しなさい。)

その後にも色々あったが、読者は今頃きつと飽きたから、残りは省略する。

## 第2章

### 自己啓発

#### 自分を探しに出掛ける

先日年末(2012)のテレビ番組を見て、不況や行き先の不透明な状況中で若者＝中学生-高校生が大いに悩んでいる話があった。正確には覚えていないが、番組の後で私はよくポケットに入れるメモ帳に記入したメモ書きから集約すると、青年たちに「私は誰だろう」、「私は自分に自信がない」、「これからどうすればよいか、何処へ向かっていけばいいのか」「何で勉強するかを親に聞いても答えは返ってこない」などの発言があった。私もその年頃全く同じだった。だからと言ってここまで来た道や今までやってきたこと、私の選択など今の若いものに薦められる訳にはいかない。薦めるべきかどうかも分からない。親孝行も全くしない、「大人」かれ見れば凄く馬鹿な事をやったからだ。

もし私がここに書きとめている駄文で現代社会の「理想像」の一つである = 「成功した人」のイメージや目標から一端目をずらし、人によって他にも大事な事あると気付くかせられるのなら、成功者とほど遠い存在、脱落者の私は・・・物凄く幸せだ。

## 知的刺激

第一部ではまだ自己認識が出来ていないにも拘わらず、先生達/権力者などに反抗的な行動を取り続けてきた。時期や出来事が一部重複しているが、これから前述の反抗期を乗り越え、自分自身を探しに出た話しをしたい。現在の職業＝鍼灸師の準備活動だったとも言える。

柔道や合気道をやり始めた頃勿論何も難しいことを考えたわけではなく、単なるスポーツだった。しかし、思春期に入り、当然世界はどういうものかを知りたくなり、自分はその中でどういう役割を果たしているか、果たすべきかが若者が知りたくなる。世界の本質を知るため次第に合気道の稽古が持っている意味や一所懸命していたギターの練習も自己啓発の手段に変身しはじめた。

決定的な出来事として先ず凡そ15歳頃自分で買った中国の古代哲学書を購入し、殆ど全部を読んだ事だった。今でも本棚に大事に持っている:5冊のセット＝ **Die Philosophie Chinas**, 訳 **Richard Wilhelm**<sup>3</sup>。(前章の図を参照) 易経、老子、孔子などを含む代表的な作品集だ。現在絶版になっているようですが、当時 **Richard Wilhelm** と言うドイツ人中国学者の翻訳は他のものよりあまりにも優れていたから、その頃 易経や老子の作品の英訳はこのドイツ語訳に基づいた。よって、中国語の分からない私はさほど翻訳途中で意味が原文からずれたものを読んだわけではなさそう。

他にも哲学関連書籍やインドの古典「ヴェーダ」も幾つかを

---

3 [http://en.wikipedia.org/wiki/Richard\\_Wilhelm](http://en.wikipedia.org/wiki/Richard_Wilhelm)

読んだ。その刺激によって15歳の幼い私の世界観がかなり変わった。合気道の創始者である植芝盛平も中国やインドの古典口調の言葉を言い残したから、更にそちらの「道」が私にとって魅力的になった。

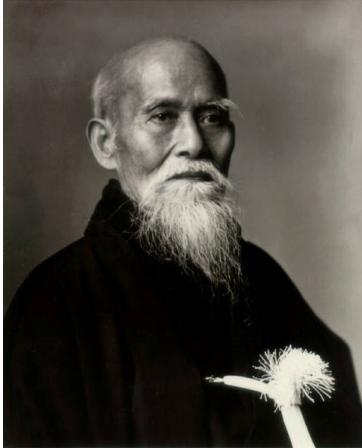


図 13: 合気道の創始者である  
植芝盛平

中国古典哲学においても、インドの古典にも競争心より自己啓発が優先順位が高いとその歳で理解した。もともとこの類の思考パターンはどこから来たかが分からないが、思春期 - 己の芽生え始める時期 - から私は兎に角競争が嫌いになった。柔道はスポーツであり、試合もあるから、順位を争う好む周りの人々の間にかなり人気があった。

## 競争は証にあわない

武術は本質的競争から生まれてきたものですので、戦闘技術をスポーツに純かしても相変わらず競争であり、優劣の戦いである事に変わりはない。現在のオリンピックを見てそれが良

く分かる。私は選手たちが何かの **道** を求めているように見えるにはかなり苦労しないと出来ない。試合にでる。試合に勝つ。相手を倒す。強敵に向かう。試合(の流)を支配

する。自分は全ての人(選手)より秀でる。まるで野獣が牙を剥き出す雰囲気だ。一対一の試合、例えば柔道、においてこの心構えを嫌悪した。チーム対チームの場合、観衆が二つの大きな群集でそのような敵対感情を持つようになるとなお更に。

(好きな人に申し訳ないが)代表的な例はサッカーの試合でしょう。国際試合で特定人物に対するのではなく、相手の国、選手/チームが全くルール違反何しなくてもブーイングされると、いかにもスポーツの fair play 精神が憎しみに置き換えられるが分かる。

その点では私がであった武道の内に合気道が異なる。護身術であるから、攻撃を仕掛けた者が必ず「負ける」から、試合と言うものは基本的あり得ない。合気道の創始者の言葉によると、合気道家が必ず「勝つ」から、かかってくる相手に対して敵対心よりも愛情を持って、短時間で決着する衝突に直面することが出来る。自分は単に自然の法則に従い、ものの流れの方向を僅か変えるだけだ。攻撃も、反撃も、戦闘も競争もない。思春期最中の私にはこれが凄く魅力的だった。

試合がないし、競争もないので通常のスポーツと異なり、当時芽生え始めた自己認識にぴったりしたものだった。その頃から自分の証に合うものとそうでないもの少しずつ無意識に識別し始めた私にとって合気道が直に自分の「道」の一つだと分かった。

## 道 .. 色々

道は単に〇〇何番街だけではなく、いかにも禅や仏教の世界で考えられている「道」の意味もあるだ。人生の運命の道筋。

因みに、ドイツでは町の地図にそれぞれの道にアメリカのような番号ではなく、多くの場合名前が付いている。例えば大きな業績を残した人物の名前 (Leibniz, Humboldt, Goethe etc.) 或いは特定の職業の店が密集した所、元々その地方の場所の名前、方位、現在か過去の特別な建物など。例えば生まれ故郷キールに大きな造船所がある。よって、造船所の前にある道路は「造船所道路」= Werftstraße と呼ばれる。地図上どの道路が先端と終点ある。仮に造船所道路が地図の左から始まり右に向かうとしたら、道路沿いの建物は番号付けられている。道路の片方偶数 2, 4, 6, 8 ... そして反対に奇数 1, 3, 5, 7 ... よって、ある住所を探す場合単に道路の名前と番地さえ分かれば簡単にたどり着く。

合気道は私にとって最初に出会った、運命(?)に導く道路であって、その沿線に幾つかの試験で〇〇級や段を獲得することで自分の居場所が決まる。向こうに人達は〇〇級よりもその級を表す帯の色で自分のレベルを表す: 僕は今「緑帯」だ。当時合気道をやった人の数が非常に少なかったため何かの「段」を持つ人はいかにも希少動物みたいな存在だった。段においても色で判別が付かないから、何かの段を持つ人は「黒帯」→ 先生レベルだ。段の持ち主は少なかったため、初段というものはその環境では、大きな目標に達した事を意味した。黒帯レベルに達成した事は一連の修業の終点として認識される傾向があった。

ちゃんとした先生がいなかったため、私も所謂黒帯を習得する前既に「先生」と言う地位に立たされた。そう、された。自分はまだそんな身分ではないと思ってたが、周りからプレッシャー掛けられ、先生を演じるようになった。

いいこともあったが、心に潜んでいる大変醜い部分と直面する試練にもなった。つまり、ただの先生なら日頃稽古した道場で後輩(→日本の後輩に相当する概念は向こうにないと思っただろうが無難)を指導すれば良い。私は合気道の何も知らない癖偉そうな振る舞いとさせられたが、他に教えてくれる人がいなかったためしかたなかった。

問題はいつも稽古した道場<sup>4</sup>(暁武術クラブ)において合気道のトレーナーとして採用され、謝礼として一回の稽古ごと幾らかの「報酬」を貰った。特別大した額ではなかったが、お金の、私に言わせる、「毒性」で心が乱れ始めた。

本来私は合気道が大好きだった。何があってもお稽古に行きたかった。第一部にも少々触れたように、学校のための動力を放棄するほど。

しかし、報酬をもらい始めてから暫く経ってから、(滅多に起こらなかったが)例えば体調がいま一つか、学校に生き残るため矢張り少々勉強しないとイケなかった時期でお稽古に行きたくなかった際)いけばいくらかお金を貰える事を動機でお稽古しにいった。合気道のためではなく、お金のため道場に行った。

それに気付いた時、自分自身の心構えは酷く穢れているように感じた。多分これは「お金」と言う魔物を初めて対面した事になり、何となくお金に対する嫌悪する感覚が生まれた。

## 世の中に考え方は色々

多分同じ頃で「パパラギ」と言う本をよんだ。それもお金に対

---

4 <http://www.akatuki.de/>

する不信感を煽り、今日現在まで続き、最終的私には全くお金(商売)に脈がないという状態をつくりだした。その本は1920年に出版された。どうやらドイツ人がヨットで南太平洋のどこか小さい島に住んでいる民族を訪れ、最初酋長との会話を記録し、後に酋長をロンドンに連れてから彼の印象や考えを書き記したものだ。

島民はそこまで余り文明との接触がなかった。そのためヨットを見たのも始めたらしいから、適切な言葉がなかったため、青い空の前に現れた白い帆が空に穴が開いているように見えたようだ。「パパラギ」は青い空に三角の穴が開いている意味を表す言葉らしい。同時に何となく本の主人公である酋長を代表する語にも使われている。

その酋長はロンドンに行ってもとんでもない光景を幾つか目の当たりにした。集合住宅:人は箱(=建物)に住んで、その中に更に箱(=アパート)があって、なお更にその箱の中にもっと小さい箱(=部屋)に人がいる。これでも不十分かと思うと、その箱の中に尚更複数な大きさや形が様々な箱(=家具、箆笥など)に正体不明なものを沢山押し込まれた。

面白い話は他にも色々あるが、私にとって最も印象的であったのは「支払いの場面」だった。島ではお金そのものがなかったようで、物を売るや買う際お金を使う行為を説明する必要があった。そしてパパラギの目に物を買う時売り手が「手を出して」、お金を受け取る動作、もしかしてその時代で手も余り綺麗ではなかったりして、爪のしたくろぼいゴミが合ったとも想像できる、が悪魔がゴツゴツした、黒い爪のある「手を出して」人の魂(命)を奪い取るように写った。全く同感!

私は今日でも治療が終わって、基本的患者から治療費を受け取る「必要性」はあるが、鳥肌が立つような違和感が起こ

る。お金を受け取るたびに。私の代わりに誰かやってくれないかといつも願っているが、人手を雇える状況は夢の向こうな世界だ。

思いがけもない様々な方向から多彩な影響を受けるのは青春時代の特徴でいたって普通と考えましょう。青年の最も大事な「仕事」は、目が回るほど膨大な情報量や多彩な刺激の中から本人の運命を方向付けするものを見つけ出す気がする。

ある意味ではそのような仕事で大変忙しい時期だった。一方精神的な修業として中国、インド、ヨーロッパの哲学、文学、科学の読書に没頭しながら、一方柔道や合気道の肉体的な修業(この言葉に相応しい努力していないから、「修業」を使うと少々恥ずかしいが、ここに使える他の適切な言葉は見つからない)をした。

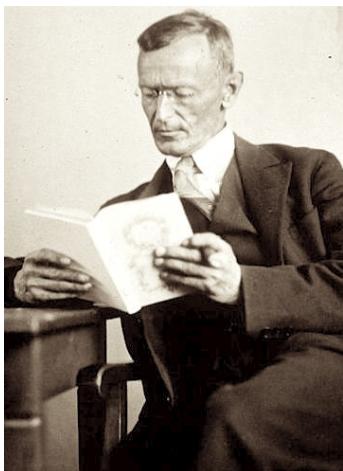


図 14: Hermann Hesse

考え方次第ではギターの練習は肉体的と精神的な側面を合わせた修業にも捉えられる。余り役に立たなかったのは一般の教育課程だと言う印象がある。

文学分野において青春時代で一番好きな作家は Hermann Hesse だった。最終的彼の作品を全部読んだが、その頃一番好きな本は Siddharta だった。それは結局ヘッセによって文学的花を咲かせて描かれているお釈迦様の

ライフストーリーだ。生意気でしょうが、何となく Siddharta が自分の運命を探す過程と私な未熟な努力に類似点も見えたような

気がした。

無論私は悟りを開いたではない。だが、最終目的＝修行を完成し、悟りを開いた人＝如来になるのではなく、その途中の過程＝道<sup>道</sup>のほうが大事だと言う考え方は私の幼い心を大きく揺らした。ヘッセの本では王子様が身分を捨てて、修業し、お釈迦様になると言った過程を経て、最終的 Siddharta がある川で肉体労働する渡し守として働きながら余生を過ごした。悟りは開いているが、聖人のような形をとらない。息子がいるけれども、悟った知恵を子供に伝承したかったが、子供は家から飛び出して親元から離れてしまう。そう言う庶民的は色合いが好き。

## 出発へ

柔道から武道の道に入り、やがて合気道の世界に移り住んでしまった。前述のように合気道を教える立場にも立たされた。あるところで生徒の中に物静かな中年男性がいた。彼は太極拳が好きであったため、一所懸命本など手当たり次第の「教材」から独学しながら、数回中国人大学生から習ったこともあった。

いつか合気道の稽古後その太極拳を見せてくれた。他の武術も多少嗜んだが、自分の性に合うものとそうでないものがある事既にはっきりしていたので、太極拳を見た瞬間で「これが自分の性にあう」と確信した。

17歳の時テレビで武術に関するドキュメンタリーを見た。その番組に知っていた武道のほぼ何でも取り上げられた：柔道、空手、合気道、剣道、Tae Kwon Do, Kung Fu etc. ... そして日

本の弓:弓道。この武術ではとても長い竹製の弓で凡そ 28 m ほど離れている的を狙う。ヨーロッパの弓は日本の物より短かいが、大変強力。その為弓を引く姿勢も違う。弓道の場合普段道場の床に立ち、芝生を乗り越え、離れた所に設置した的を狙う。

しかし、例のテレビ番組では、きっとテレビで格好良く映るように、ある弓道の師範が芝生に立ち、弓を持ち上げ、引き、そして矢を放った。その矢は的に当たったかどうかはテレビに出なかった。シーン全体は多分 2 分未満だった。

### しかしそれは十分だった！

この 2 分のテレビ映像は自分の頭の中に火花のようなものを発生させた。翻然として「これだ」との印象で自分は弓道をやりたい！- やらなければならない、と確信を持たれた。



その後近くに弓道が習える道場あるかどうかを調べた。当時 2 件を見つけた。その一つはハンブルグにあった、もう一つはパリだった。キールからハンブルグまでは 100km、間に一

本道の高速道路で1時間でいける所だから、やろうと思えば通える範囲ないだった。

しかし、(当然でしょうが)両道場でヨーロッパの先生が指導に当たった。理想を追い求める青年(=理屈が全く通じない若者(馬鹿者))の私にとって無論欧の先生の弟子ではなく、「本当」の先生に習いたかった。結論は疑い余地なく明白だった:

## 日本に行くしかない!

### まだ早い

当然そのままでは出かけられない。何しろまだ17歳で高校生だった。全体の学校生活中合計2回も留年したため、私にとって高校卒業は20歳になった。日本と少々違う。第1章で説明したように退学させられるところもあったので、このあたりで取敢えず学校をちゃんと卒業する決心した。

学校が卒業に向かうと年中当たり前のように先生や生徒同士に「卒業したらどうするの」と聞かれる。私は卒業したら先ず日本に行く。それが世界旅行の前半だと説明したら、先生たちも生徒の仲間たちもほぼ例外なく「お前頭可笑しいじゃないか」と言われ



図 15: 私に太極拳を教えて合気道の「生徒」から頂いた本

た。色々な人に何度も聞かれたが、いつも同じ答えを出したから、最終的こちらは頭が可笑しいだと確定診断になって、相手も聞く事を諦めたようだ。

なお、武術をしている仲間の内何人も、そして私は武術が好きで、「弓道」を習うため日本へ行こうとしている事が分かっている仲間何人が私にある

本を薦めた: Eugen Herrigel<sup>5</sup>: "Zen in der Kunst des Bogenschiessens"

(ヘリゲル:「日本の弓術」)

当時武術やアジアの事に興味を抱いている人々の間かなり評判が高かったようです。著者:オイゲン・ヘリゲルは、ドイツの哲学者。海外では日本文化の紹介者として知られている。当然タイトルを見るだけでも興味はあったが、意図的その本を読むのを拒否した。読んでしまえば何かの先入観は出来、後の勉強に邪魔されると予想した。結局まだド

イツにいる3-4年間で何度も、何人にも推薦されたが、来日後実際の稽古を始めてから2-3年経った時点で読んだ。実践的



図 16: 音楽専攻コース(生徒数=10人)でウィーンまで修学旅行に出掛けた際似顔絵を書いてもらった。

5 Eugen Herrigel, 1884年3月20日 - 1955年4月18日

な経験があつて矢張り大変参考になった。そして、事前に読まない決心も正解だったと後で確信を持った。

来日してから予定していた6ヶ月より長いないと弓道は勉強できない事私に説得させたのは後に又説明するが、北鎌倉の円覚寺のお坊さん:須原耕雲先生であった。須原耕雲先生は前述のヘリゲル先生を直接知っていたそうで、禅関連で交流もした。これら一連の出来事は何となく「運命的な出会い」であったと思ひ込んでいる傾向がある。

## 高校卒業後福祉との出会い

高校を卒業した段階ではまだ大学で勉強しようと思った。本来クラシックギターが好きだったので、友達と一緒にどこかの大学で音楽を勉強しようかと話し合つて、多少具体的の準備にも取り掛かった。しかし途中で自分は余り才能がないのではないかと心配し始めて、暫く経ってからその計画を放棄した。代わりに高校時代で音楽のほか専攻したのは化学を卒業後大学で勉強しようかと一時的思った。そのため必要な平均点数が辛うじてあつたから、何とか実現可能な計画だった。無論、それは日本から帰つて来た後にならざるを得ない。何しろ弓道のため日本へ行くのは最優先的な事だった。

しかし、高校を卒業してそのまま国を後にできない。ドイツでは徴兵があるから、特別な理由がない限り、成人(18歳で成人になる)になって先ず軍隊に入らざるを得ない。国の決まりですから若者の意見や賛否は無関係だ。しかし、何かの重大な理由、例えば宗教的な信念、があれば、徴兵を拒否して代わりに「良心的徴兵忌避者」になる制度もある。

良心的徴兵忌避者になりたいと希望すれば、国を相手にして裁判になる。裁判において自分は何ゆえ武器をもてない事を審査員に示さないといけない。色々な手続きがあつて、理由書を書いて提出し、証人を指名し、証人も文章で良心的徴兵忌避希望者はどうしても武器をもてない事を証明しなければならない。そのような下準備は凡そ1年掛かる。第一審で通ればいいですが、自分の主張が却下されてしまえば、2段階で上訴できる。最終レベルは最高裁判所だ。そこでも負けてしまえば、軍隊に入らざるを得ない。

幸いに私は第一審で通った。良心的徴兵忌避者として承認されてしまえば、軍隊に所属している兵士と同じ期間、法律の下で指示される福祉施設で仕事しなければならない。制服は着ないし、鉄砲も持たないから、ちょっと大目に見てもいいだろうと思うと大間違い。もし社会福祉の奉仕している間「ちょっとした旅行」したら、私の場合日本へ出かける、それは兵士と同じ扱いになる＝脱走兵になる。刑は10年の刑務所だ。

よって、良心的徴兵忌避者になったうえでは、何より先に社会福祉の奉仕期間を終わらせる必要がある。

社会福祉の仕事をしている間色々な「現場」で社会の真実を見てきた。夜仲間と所謂学生のための **pizza bar** (兎に角安く飲食できる)へ行くと、全く知らない人と一緒に大きなテーブルに座る事が普通ですから、周りの学生が何を話しているのも聞こえる。近くに座っている学生の会話を意図的「盗み聞き」したわけではないが、自然と耳に入ってしまう、内容から判断するなら、恐らく社会学や福祉の何かを専攻した者だった。自分は例の社会現場で経験している現実からかけ離れ、

雲の上でしか存在し得ない空想の世界にいる印象を受けた。

その印象は若い(馬鹿な)私に影響をし、そんな空想の世界にいたくないとの決心に繋がった。自分の手で実際に存在するものを掴んで(ergreifen, erfassen→ 日本語も良く「状況を把握する」と言う)、現実根を下ろしている職人として偽りのない生き方をしたいと決めた。言ってみれば、鍼灸「道」への第一歩だったかもしれない。

## 少々アルバイト

ここまで17歳から殆どのお小遣いやアルバイトで貰ったお金や前述の社会福祉の仕事の「給料」を日本の為に貯金したが、当然計画した世界一周の旅には足りなかった。よって、暫くアルバイトする事を決めた。丁度良心的徴兵忌避者として働いている間週一回にある障害児の面倒を見る事になっていた。その子のお父さんは建材会社の副社長であるから、口を利いて貰い、5ヶ月そこで働く事になった。給料は社会人としてたいたものではなかったかもしれないが、一度もチャントした給料を貰った事のない私にとって大金に見えた。

5年間で溜めたお金と建材屋の仕事で貰った給料、自分の持ち物を売る事によって得たお金は最終的当時凡そ1万マルクだった。今日現在の価値は多分150万円相当だったと思う。当然世界一周の旅に全然足りなかった筈だが、世間知らず小僧の私には理解できなかった。



図 17: 買えそうもないとまるきり理解できなかったが、このような船を買うとの夢を見た… そのような夢で頭がいっぱいになる若さは懐かしい。

旅の計画もあやふやだった。決まったのはシベリア鉄道で日本に行き、当時の法律に基づいて2ヶ月分の観光ビザを貰い、それを2回延長できるので、日本滞在の最長期間は6ヶ月となる。その期間を使って兎に角弓をやりたかった。その後… 何となく東南アジアを回って、どこかで帆船を買って（そんな物を買える筈はない事が一度も思いついたことない）オーストラリア経由サンフランシスコへ行く予定した。現地で私は出発して一年後ドイツから来る別の「トーマス」をどこかで会う。どうやって、どこで会うか何も決めていなかった。いかにも阿呆の計画だと一目瞭然。だが、私は独自の夢の世界に入り込んで、現実性が完全に欠けている計画だと理解できなかったか、それとも理解したくなかった。

十七歳であるテレビ番組にて衝撃を受けてから五年後、高校卒業や徴兵忌避者として社会福祉の仕事を終え、建材屋で暫くお金を稼ぐ為働いてから、大体の自分の持ち物を売ったり・人に上げたりし、旅に持っていく物をリュックサック一つに纏めた。貯金の凡そ1万マルクをトラベラーズチェックに交換してから - 当然親の反対を無視して - シベリア鉄道の片道切符を手にしながらか旅に出た。

親は無論先ず「手に職を」するか、大学に行くかを強く勧めたが、私は丁度学校も徴兵忌避役年限のが終わり、一時的いたたガールフレンドとも分かれて、大変都合の良い「隙間」が出来たと反論した。いま大学に入るか、職業訓練始めてしまえば、再び少なくとも3-4年間動けない状態になる。それ終わってしまったらまだ日本へ行くチャンスが残っているかどうか分からないから、そのチャンスが一度きりしかないと思った。もし新たなガールフレンドが出来てしまえば、あるいは結婚でもすれば・・・二度と国から離れられないだろう・・・

だから「今」しかない ☰ ☱ ☲ ☳ ☴ ☵ ☶ ☷

ドイツは当時今よりも福祉大国であった。現在は世界中に見られる社会福祉の「難」に見舞われ、安心して病気になり、歳を取る事は出来なくなった。私は成人になる頃その社会福祉はまだそれなりに健全であったため、事故に巻き込まれたりして、病気になったりして、社会的安全網が余りにもしっかりしていたため、倒れたくても倒れられない。

自分としてそれは一種の過保護として感じた。冒険したい。世の中に出で、自力で生き残れるかどうかを見

たかった。そのような馬鹿な事を考えられるのは無知な若僧だけ。結局旅行保健など何一つ掛けないで片道切符で出かけた。

未知の世界一人でどうなるだろうか。凄く無謀だが・・・その時爽快感に溢れ、心配する余地も能力もなかった。



図 18: これから生まれ故郷から一人で離れて遠い道の先にある完全未知な世界へ出掛ける。道路の奥に見える黒い天は一台のバイク。私の後姿も同様だったに違いない。



## 日本へ

小学校から教育制度に反抗しながら独自の概念にしたがって勉強してきた。勉強そのものは好きだったが、学校は嫌い。かなり大げさだが、知識を求めたり、得たりするのは一種の快感で、その他の活動、例えば武術の稽古と合わせてしまえば楽しい。

学校の範囲を超えて自分自身を探し始めて、幾つかの刺激的な出来事によって進むべき(?)「道」も凡そ定めて、やらざるを得ないものを終わらせて、そして僅かだが、現実の必要性に迫られてお金も作った。いよいよ17歳から夢を見たものを現実になろうとする時期が来た。

旅の始まりとしてお兄さんが東ドイツの国境まで送ってくれて、そこからヒッチハイクでベルリンまで行った。ソ連のビザも必要だったから事前キールで汽車の切符 - 片道 - を買った。ベルリンに到着したのは当然「西ベルリン」だった。再び国境を越えて東ベルリンでポーランド経由モスクワ行き of 汽車に乗り込んだ。途中夜でポーランドの国境を越える際、機関銃を手にした物騒な国境警備隊が列車に入り、大声で何か怒鳴りつけられた。言葉が分からないからパスポートを見たいだろう

と思って、パスポートを見せた。不機嫌そうな顔はしたが、何とか引き下がった。

ビザを貰う条件としてどうしてもモスクワで一泊せざるを得なかった。選択余地なしで大変高いなのに、凄く不親切なホテルで泊まった。サービスはお客さんが購入する「商品」だと考えられているのどの国でもあのホテルが即座破産する筈だ。

頼んだモーニングコールも勿論してくれなかったから、危うく汽車の出発まで間に合わなかった。結局朝食なしで、辛うじて汽車の出発時刻までかけ付いた。そこからシベリア鉄道の列車だけで10日間の長旅が始まった。シベリア鉄道は結局モスクワからナホトカ(Nakhodka)まで続く。凡そ9700 kmの道程。



図 19: シベリア鉄道のルート。私は赤い線に沿って通った。途中線路はバイカル湖の南に回る。これは素晴らしい光景だった。

しかし、その頃ソ連と中国の間に揉め事があったため、外国人はモスクワからハバロフスク (Khabarovsk) まで普通にロシア人と一緒に汽車に乗ったが、ハバロフスクで下車させ、再び事前強制的に予約させられたホテルで暗くなるまで待たされた。そして暗くなってから外国人が専用の車両でロシア人から「隔離」された状態で何も見えない闇夜にソ連と中国の国境沿いナホトカまで「運ばれた」。

隔離されるまでは結構楽しい旅だった。私は真夏でその旅をしたから、汽車の窓から景色も眺められた。同じシベリア鉄道で来日した別の外国人と話したところで、かれが 12 月でその道を通った時、外気温がは余りにも低いから、窓は外から厚い氷で覆われ、何も見えなかったそうだ。やはり夏でよかった。

景色と言えば、あの国は極めて大きいので、通っていた所ではさほど変化に飛んだ景色ではなかった。日本でもドイツでも考えられないような、何日間も殆ど変化のない地域と通った。途中で複数の「駅」で止まったが、停車時間が普通5分から10分程度で、時間になったら汽車が汽笛を一度や二度を鳴らして勝手に走り出す。もしまだ外にいれば、一所懸命追いかけて、飛び乗る命がけの乗車方式がしいられた。スリル満点だ。

最初は気が付かなかったが、毎日1000km以上東へ進んだから、時刻も変わってしまった。飛行機のような速さではないが、一日あたり一時間ほどの時差が生じた。飛行機で短時間で8-10時間ほどの時差が生じることがあり、それに順応するために暫くの間時差ぼけが起きる。汽車では一日あたり一時間しかずれないので、時差ぼけは起きなかったが、何となく肉体的・精神的の感覚も多少ずれて、妙に(雲の上に)浮いているような気分になった。時差ぼけは余りいい気分ではないが、あの雲の上に浮いている感覚はとても快感だった。

でまた大変不親切なホテルの強制滞在を無事に乗り換えて、汽車の旅はナホトカで終わった。汽車から降りて、又も鉄砲を抱えている複数の兵士が配置され、左右柵に囲まれた通路を通過して、今度船に乗り込んだ。これは私は覚えている限りソ連の船ではなかったから、私の目に大変立派に映った。

ナホトカから出港して、北海道と本州の間を通り、本州の海岸線に沿って横浜まで二日半ほど南下する船旅だった。途中で無論(私の感覚では)豪華客船のレストランで食事し、ホテルのようなキャビンで寝る。日本では梅雨時だったが、その年で、ちょうどその時期に妙に晴れ、「海上景色」がとても綺麗だった。

本州海岸に沿って航海中で風が一時的結構強くなったため、かなり大きい船なのに大きく揺れた。左右に揺れる - 船酔いの原因 - と共に進行方向に対して大きな波を乗り越える際映画で見られうシーヌのように、船首が一旦空に向けて持ち上げられたと思ったら、次の瞬間(感覚的)真っ逆さま再び海に突っ込む。今現在はそのような船旅をすれば船酔いするかどうかは分からないが、少なくとも当時船酔いはしないどころか、船の動きを大変楽しんだ！。船首に立って、しっかりと捕まりながら(この部分は映画「タイタニック」と違う)、波しぶきを浴びて陶酔を覚えた。

二日後多分千葉沖で航海して横浜を目指した時、梅雨に極めて珍しいと言われた青空を背景に富士山が紙切り細工のようにくっきりした姿を現した。夢の国に到達したと幸せを実感した。

日本への旅全体が凡そ2週間掛かった。

日本に行くこと決心した事、或いは計画の実現性に関する疑問は17歳であのテレビ番組を見てから、実際22歳で出発するまでの5年間に一度もなかった！

## 第3章

### 未知の世界との遭遇



青春時代の妄想に迷わされ、片道切符で長旅の末やっと "The land of the rising sun" (日出づる国) に辿り付いた。ドイツにいる間武術にかなり夢中だったので、幾つかの関連書籍を読んだ。日本に行くと言う変な考えを抱くようになってから、親に誕生日プレゼントとして全般の「日本の紹介」と言う類の本を貰った。何冊かの本を読んで、そして自分勝手に「武術って何だ」と言う先入観を鎧のように身(精神)に付けてこの国に乗り込んだ。

だが、自分の希望的観測、先入観や想像と現実は全く関連性がないほどかけ離れた。初めて日本に上陸した 1979 年で既に全世界が認識していた近代的国家だった事私も一方頭の隅っこのどこかにあった。

しかし世間に疎い私は何となく女性が着物を着て、下駄を履いて、当たるところの「普通」の家が皆日本の大変魅力的和風建築スタイルで作られ、それこそ町中に西洋人にとって幾

分神秘的な要素が漂うお寺が建っていると思った。

世界の反対側から長旅の最終区分であった船旅は横浜の関内で終わった。ドイツで柔道をやった頃、凡そ12-13歳の時、日本の戦艦がキール港を訪れた時柔道を通して知り合った日本人とずーと文通していた。その人が私を横浜で向かえに来てくれた。関内の棧橋から駅まで、そして東京のユースホテルまで案内してくれた。彼が私と一緒に棧橋から関内駅まで歩いている間当然あの有名な関内スタジアムの側を通った。あんな大きな建物は何だろうかと思いたら、「野球スタジアムだ」と言われた時同時にびっくりとがっかりした。着物や日本建築どころか、近代的なコンクリートの塊で野球だって。日本に到着して10分経たない内既にカルチャーショックだ。



図 20: 12-13歳からずーと文通した「けんじ」(名前の漢字は知りません)さん

初めて来日した時梅雨の真最中:6月22日だった。日本人にとって普通 - 前述の船から富士山が見えたのは決して普通ではないようだ - なお天気だっただろうが、北欧出身の私にとって30度近くの気温と多分80%ほどの湿気がかなり耐え難いものだった(その日に撮った、今残念ながら見つからなくなった写真で映っている真っ赤な顔が物語っている)。カルチャーショックが精神に、環境条件が肉体の同時攻撃は強烈だった。

それでも不十分かのような思いで関内駅で電車にのった。関内駅はまだ何とかなったが、次の横浜駅で線路はいくつあるかも見渡せないほど、丁度夕方のラッシュアワーだったため、外国人としてテレビでしか見たことのない「押し込み作戦」にも巻き込まれた。文化的や環境の相違のみならず、人工的な世界の違いにも圧倒されてしまった。

知り合いは持っていたユースホステルの住所まで案内してくれた後に分かれた。チェックインをした後でユースホステルのどこかの共同スペースにお茶を飲みながら少々休んだところにどうやらテレビのレポーターが押しかけてきた。そこにいる人々にマイクを突きつけて「サミットはどう思いますか」(第5回先進国首脳会議は1979年6月28日から29日まで日本の東京で開催された先進国首脳会議の事を指した)と英語で聞いた。

だが、その時はまだ日本語が殆ど分からないで、英語も僅かしか話せなかった。「サミット」と言う単語を始めて聞いたし、政治も全く分からない私は恐らくかなりぼーとした(馬鹿な)顔をしたとおもう。レポーターは質問を2-3回繰り返して「こいつ何もわかんない」と言うような顔をして、マイクを次の人に突きつけた。一種の社会人洗礼のようなものだった。

その後、ユースホステルであった何人の外国人と一緒に食事しに行った。向かったのは道路の反対側にあった居酒屋。当然居酒屋って何だろう誰も知らなかった。メニューも今ファミリレストランのメニューに通常ついている写真なしの日本語のみだった。折角ここまで来たと思って、更なる冒険しようと思心した。メニューの適当なところに指を刺して、そこに書いてあるものを頼んだ。ウェーターも私の顔を見て「本当に大丈夫ですか」のような質問したらしい。いいから・・・そのものを持ってき

て頂戴。暫く経つと魚の頭を持ってきた！ドイツでは魚の頭はゴミとして処分するものだし、そして魚の頭に食べられるものは余りついていない。再び別の所を探す気もなかったから、その夜結構なすきっ腹で寝ることになった。

日本に上陸して、僅か数時間で今まで「普通」だと考えたものが覆され、何年の間大切に育んできた自分独自の夢と想像したイメージが粉々になってしまった。未知の世界との出会頭において上々なスタート。

## 作戦開始

さて、弓道のため世界を半周して来たが、来日してから適切な道場を見つけるのは思った以上難しいと悟った。殊にドイツで読んだ本で培われた理想的なイメージに合うものを中々遭遇し得なかった。

つまり、私はイメージしたのは、来日してからどこかで弓の師範を見つけて、先生の家＝道場に下宿しながら修行する。朝の4時に起きて、道場の前を竹箒で掃いてはらお稽古に入るのは普通の日課だと思い込んだ。要するに時代劇に出そうな内弟子。

日本への旅に出る数ヶ月前に、ドイツで日本語を少々教える人を探した。新聞広告を通して見つけた若い奥さんに日本語の基本やひらがなと数字(一から十まで、百、千、万、億など)の漢字を教えて頂いた。その奥さんを頼んで「公益財団法人全日本弓道連盟」宛て、私は日本で弓道を勉強をしたいから、道場を紹介して頂きたいと言う趣旨の手紙を書いて貰った。暫く経つとお返事も来た:来日してから現地で適当に探したら

どうですか。全然助からない助言で少々がっかりした。どこか今過去十数年前から外国人(鍼灸)見学希望者がいれば、見学出来る場所を探す時日本鍼灸師会、全日本鍼灸学会、専門学校などで問い合わせる際、常に門前払いされてしまうことと似ている気がする。

来日してから数日間前述のユースホステルで泊まった後、あの奥さんのお母さんの家(東京)で約3週間ほどお世話になった。色々な人を聞いたりして、あれこれ調べたりして分かった道場幾つかを見つけ、順番に訪れた。一番遠い所は京都だった。

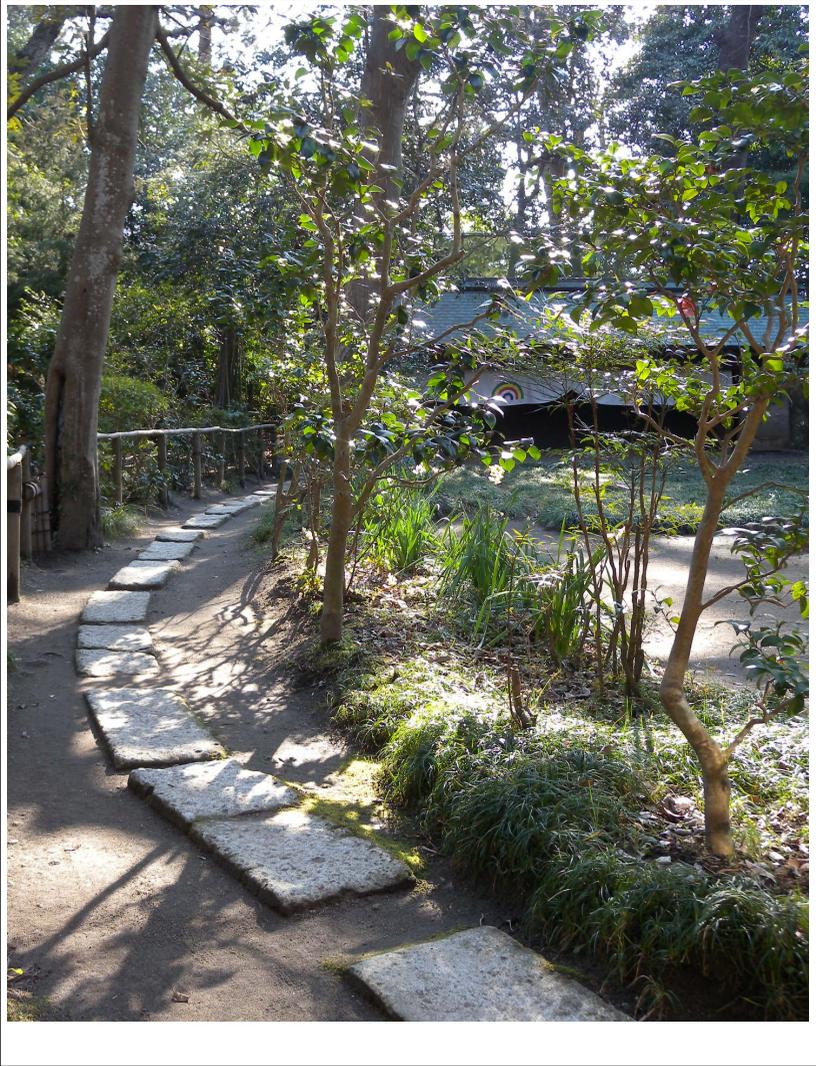
所が、どこに行っても返事は「お前が求めているものはここにはないよ」としか帰ってこなかった。そろそろ気分が落ち込み始めた頃、ある方の紹介で当時鎌倉に住んでいたドイツ人に出会えて、北鎌倉の円覚寺で住職であった須原耕雲先生と相談するために訪れた際通訳してくれた。お坊さんの住居に招かれ、お寺においてそのような相談が出来ただけで感動した。



図 21: 閻魔堂の入り口。左端は弓道場になっている。









→ 上の写真を順番に

- その日もうお稽古が終わって道場が閉まっていたが、反対側の壁、鏡の上にヘリゲル先生の弓が飾ってある。
- 2番目： 的に向かう眺め。稽古が終わったからの的はつけていない。
- 道場の方から射た矢を取りに行く道
- そして的の方から道場に向かう眺め

このような「稽古環境」は青春時代にいつも夢としてみていた物だ。



図 22: これは須原先生の「続灯庵」ではないが、須原先生の「庵」は似ているし、来日したばかり私は感激した。



図 23: 須原先生の「続灯庵」の入り口

純和風の建築、多分8畳の部屋に座卓ひとつ、床の間に掛け軸と一輪挿し。私より頭一個分小さな、和服を身に纏い長い白い髭のお坊さんが部屋に入って来ると私に僅か微笑んでくれた。これこそ日本だと喜んだ。須原先生は円覚寺の正門をくぐり、直ぐ左にある閻魔堂に付いている弓道場（閻魔道場）を設立した人。閻魔道場の作り、雰囲気などは私が頭の中にずーと描かれている空想をそのまま実現したもの。

通訳を通して須原先生に私の願望と計画を伝えている間、

先生が何も言わず静かに耳を貸して下さった。私の話が終わると首を傾げ、さあ・・・それは難しいだろうという顔をした。

結論を先に言うと、私は計画した「6ヶ月弓道の修行」する事が非現実的で、その心構えも許し難い。先生曰く:私は弓道を「本物」の師範から習いたいならば、該当する先生方は既にある程度の年寄りだ。年寄りの弓道師範は英語、ましてドイツ語が分からないし、生意気な若い外人のため覚えて貰うのも論外だろう。よって、お前(私)は本当に弓道を学びたいならば、先ず最初の6ヶ月計画を捨てて、日本語を覚えていっしょい。日本語が分かるようになってから、初めて先生方はあなたに何を言っているのかが理解出来るだろう。言葉が分かるようになったら出直してこい。その時間魔堂(そこに教ええる先生がいらない)に立ち寄っても宜しい。

## 二度目の分かれ道

須原先生との出会いはあの17歳のテレビ番組ほど劇的ではなかったが、かなり強い衝撃だったので、「暫く」考える必要がなかった。ほぼ即ち「決めたっ」。何れにして片道切符来たし、ドイツでも、



他の国でも私を待っている大事な仕事・役目や恋人もいなかった - 今に思うと親に大変悪いことをした - から、自分を方向転換させ、新しい進路に舵を取った。英語とフランス語が余りにも点数が悪かったから退学させられ所の私が今度日本語を勉強するなんて皮肉のものだ。

日本語を勉強しなさいと言ったアドバイスと同時に、須原先生が神奈川県立武道館で教える先生がいて紹介し、特にその中谷川先生を指名してくださった。お蔭様で最終的谷川先生の生徒(弟子?)になった。

皮肉の事は言語の他にもあった。私は来日した時丁度古い神奈川県立武道館<sup>6</sup>が取り壊され、一時的その弓道部分がプレハブ形式で例の横浜スタジアムの敷地内直ぐ側にあった！来日10分後のカルチャーショック現場だ。

多分2-3年ほどそこでお稽古した後、現在の神奈川県立武道館が横浜市 of 六角橋で立派な和風建物として開館され



図 24: 県立武道館で谷川先生の指導を週3回ほど受けにいき、自宅の庭に置いた巻藁でほぼ毎日練習

---

6 横浜市中区横浜公園内 → 1936年(昭和11年)11月には公園内の横浜市から無償貸与された敷地に神奈川県立武道館(神奈川県学務部所管)が開館した。

た。そこもまた2-3年間お稽古した。鍼の専門学校に通っている間、卒業するまで。その後多摩川病院で新たな修行を始めたから、弓道場まで足を運ぶ時間はなくなってしまった。

## 道って不思議なものだ

道 - 決まるとされている教育の道に色々と反抗しながら武「道」と言う迷路の入り口にぶつかった。武道の中にも分かれ道:柔道 →合気道 →太極拳→弓道 のなかから選ばざるを得なかった。最初の大きな分かれ「道」=弓道 への願望をぶつけて、それが我「道」(自道)の方向を示唆した。

我道の方向性や結末は水平線の遥か越えて、見えない所にあつたにも拘わらず、地元比較的近くに道場があつたのに敢えて世界の反対側を目指し、先人たち(ヘリゲルなど)の話に耳を貸さないことは「急がば回れ」という道筋になるだろう。勿論その言葉は未だ知らなかった。

やがて武道→自道が医道と繋がった。医道を職業にして鍼灸師となった。思い込みだろうが、私は何となく鍼灸が私をすべく仕事だ勝手に考える。自らの選択で学問の道を放棄し、手仕事の道を選んだ。手に職を。ドイツ語では職業を "Beruf" と呼んでいる。召命=天職と言う言葉から由来する表現だ。鍼灸師と言う資格を得たのはこの道の糸口に過ぎず、後に詳しく説明するが、この道の修行を励んで、最終的鍼灸道になるのではないかと信じたい。

今から振り返ってみれば、始めに先が全く見えなかった**迷**  
**路**は最後に必然的、迷いのない**一本道**、私が口にするに相  
応しくないが、運命の成り行きにも見える。

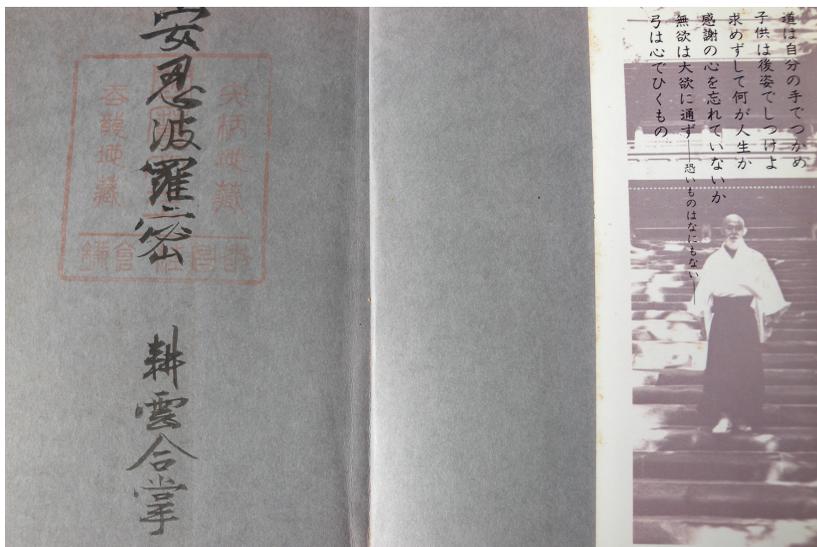


図 25: 須原先生の本にサインして頂いた

## 弓道 <-> 鍼灸

原稿を書きながら全日本弓道連盟のHPを一度見た。私は弓道をやった頃はまだそんなものがなかった。HPに掲載されている基本概念の中から三箇所をここで引用したい。弓をやり始めた時幾つかの先生に「弓は単なる武術ではなく、心構えの一つです。実際弓矢を手にしていないときでも常に身や心をもって弓道を行う。弓道は求道だ。」そのような精神を出来れば私の鍼灸の世界にもう少し取り入れたい！参考まで以下の文章において「弓」を「鍼灸」に置き換えると想像しながら読んでいただきたい。

(<http://kyudo.jp/contents/code/about>)

## 真

弓における「真」とは「真の弓は偽らない」ことであって、矢は正しく狙った的に真っ直ぐに飛ぶからの中にも偽りは無い。偽りのない射はどのようにあるべきか、という思いを持つ事も弓における真実の探求の一面であり、現在弓を射ているその大部分は「真実の探求」であるともいえる。弓における真とは、弓の冴え・弦音・的の中により立証される。すなわち、一射ごとにこの「真」をもとめてゆくのが弓道(求道)の「みち」である。

## 善

ここで「善」というのは、主として弓道の倫理性を指す。弓道の倫理、すなわち礼とか「不爭」とかは静かな心境のことであり、心的態度が「平常心」を失わないことが重要である。

弓によって互いに親しみ、弓によって協同し、和平であること。心的にも平静を失わない境地が必要な条件であり現代の弓道の特性である。

---

又は「弓」と言った**道具**に関する考え方も昔鍼灸の世界にあったような印象があるが、近年の理性を少し欠けている不潔恐怖症で廃止されているようだ。

# 道具

(<http://kyudo.jp/contents/code/ab4>)

弓道の用具はまだ完全に均一化されていないため、個人が固有の用具を自己で準備し、管理しなければならない。安全に留意して練習や、試合をするため、また、用具の十分な性能発揮のためにも各個の工夫、愛着も必要である。それは伝統的な弓道理解のための一助ともなるものである。

## 予定変更から

では予定を変更し、より長く日本に滞在すると決めてから先ず色々な手続きを済まさなければならなかった。その内最も大事で時々難しいのはビザを変更手続きだ。来日した際簡単に貰える観光ビザを取得した。それはその当時ドイツ人の場合(国籍によって異なる!)2ヶ月有効で、2回延長できるから、合計今まで何度も触れて「最長6ヶ月」になる。

より長くいたければ異なるビザの種類が必要だ。私の場合最も手ごろなのは「学生ビザ」だった。学生は必ずしも大学生の事を指しているのではなく、他のものを本格的勉強しようとしても結構だが、「生徒」がちゃんと勉強している事、教える先生・巨匠などもいる事を証明しなければならない。私は入国管理局に必要な願書を貰いにいって、弓の先生に手紙を書いてもらった、そして厄介な問題として(金銭的な)保証人を見つけて、該当する書類を書いてもらい、そして最後に自筆でなぜ日本で何を勉強したいかの理由書も作成した。

それらの書類を全部揃っても単に入国管理局に提出するだけでは先に進まない。ビザの種類を変えるのは国内で出来ない。日本大使館があるところならどこでも結構だが、一端日本から離れて、外国で出願するしかない。

(どうやらその手続きは今変わったよう:

<http://www.immi-moj.go.jp/tetuduki/index.html>

在留資格の変更とは、在留資格を有する外国人が在留目的を変更して別の在留資格に該当する活動を行

おうとする場合に、法務大臣に対して在留資格の変更許可申請を行い、従来有していた在留資格を新しい在留資格に変更するために許可を受けることをいいます。

この手続により、我が国に在留する外国人は、現に有している在留資格の下では行うことができない他の在留資格に属する活動を行おうとする場合でも、我が国からいったん出国することなく別の在留資格が得られるよう申請することができます。)

中学生や高校生の頃合気道を通して当時ドイツに留学に来た中国人を知り合った。好都合に彼が Hongkong に住んでいるし、一時的彼も太極拳をやっていたので、手紙で連絡を取り、Hongkong に行くことにした。ビザを申請するついでに彼の太極拳の先生にも紹介してもらった。折角 Hongkong まで足を延ばしたなら、「本場」で太極拳を習うチャンスは逃がしたくなかった。しかし、かれの先生(女性)は少々具合が悪かったから、その先生は更に自らの先生を紹介してくれた。詳細の事は良く分からないが、どうやらそれなり名前が通って、太極拳の教科書を執筆した先生だった。

中国では何もかも商売ですので、例の先生に会って、通訳を通して話を付けた際、その段階でビザを申請してから発行まで凡そ3週間掛かるといわれたから、三週間の間に〇〇太極拳の方を〇〇金額で教えてもらう契約書を交わした。本来の太極拳の方を三週間で覚えられないから、時間の制約があると思ったから、妥協して省略した方を習得する事にした。

しかし、ビザの申請には何かの問題点があった(→Hongkong の日本大使館ではどんな問題があるかを教えてくれなかった)から、2ヶ月半ほど Hongkong にいた。手続き

は進まないし、日本大使館は全く協力してくれなかったから、日本にいるスポンサーを頼んで、入国管理局で問いあせて貰ってやっと問題点が分かった。問題を解決するため一度日本に戻り、必要な手続きをしてから、今度ビザを貰えると言われたが、国内は駄目！もう一度 Hongkong に飛んで、向こうの大使館でビザを貰って来い……

結局最初2ヵ月半、二回目約2週間、合計3ヶ月 Hongkong で滞在する事になった。それを前もって分かっていたら、例の「本物」太極拳方をチャント勉強しておけばよかったのに……

Hongkong は郊外や隣接の領域を除いてしまえば小さな町だから、見物すべくものは長くても10日か2週間で全部見終わってしまう。そう言った見物を終わってしまったら、ほかにやる事が余りなかったため、お金を払った太極拳のレッスン以外に自分勝手に練習した。多い時一日6-7時間ほど。お蔭様でそれなりに上達もした。

## 今度こそ

学生ビザで日本に戻った時、念願の弓道の稽古を始めた。お寺のような日本風な道場よりも横浜スタジアムの影に隠れているプレハブだったのは残念だったが、谷川先生に多分5-6年間ほど弓を習っている間に殆ど言葉を交わしていなかったにも拘わらず、昔の学校の「先生」と違って自然と尊敬した存在だった。谷川先生がなくなってから何年たった時別の先生に「お前同時に幸せと不幸なやつだ。谷川先生に出会って暫く指導してもらったのは羨ましい幸運だった。しかし、あのよ

うな(素晴らしい)先生をめぐり合えたから、かえってさほど優れていない先生にはどうしても生徒(弟子)としてついていけないだろう。そう言う意味ではお前が不幸だ。」

将来そのような事態になるのは当然知らなかった。当分の間週3回ほど半日(以上)道場で弓の稽古をし、借りたアパートで分厚い二冊の本:"Japanese Language Patterns" (英語で書いてある、外国人向け日本語教科書)と「漢字カード」(漢字を学習するためのカードセット)を勝手、毎日独学に没頭した。アパートの裏には山があって、その天辺に相模湾を見渡す、普段人が余り来ない墓地で空いているスペースに夕日と相模湾を見ながら毎日1-1.5時間ほど太極拳の練習もした。人が来ない山頂で大空の下で太極拳をするのも快感そのものだった。

ドイツで一度だけ日本茶を飲んだが、味が最悪だったと記憶している。しかし、来日してからちゃんとした日本茶を知って、それなしでもう生きていられない状態になり、茶道の噂もう知っているの、いつか興味に導かれその体験を挑戦した。現在の妻に進められて、茶道のレッスンを受けることになった。流派は藪の内。何かの免許やタイトルを習得



図 26: お茶のお稽古中

に全く興味がなく、単純にお茶が好きで茶道をやった。

来日してから凡そ2年半の間そうやって弓や茶道の稽古、太極拳の練習、日本語の独学、そして生活費を稼ぐためドイツ語や英語を複数の箇所であげた。しかし、いつまでも英会話のバイトだけじゃ可笑的だから、これから将来のためそれこそ「手に職」をしないと危ないと思い始めてから、青春時代の夢 1) : 東洋の思想(哲学)に基づいて自分の手で仕事 2) をしたいと考える時期になった。

まだまだ理想主義に燃えた私は先ず指圧を考えた。東洋の思想に基づいて、気の操作があり、頭でなくて、手の仕事だし、そして世界中どこでもいつまでも病気の人がいるから安定した職業＝収入が得られると思った。自分はどれ程何も知らない未熟者だと一目瞭然だ。

---

## 1) I had a dream ....

昔 - 夢が未だいっぱいあった頃 - 時々聞かれた: 将来何をしたいになりたいか?

その時何時も「この手で世界を変えたい」と答えた。

お金や権力の事ではない: 文字通り「手」の仕事で世界に影響を及ぼしたい。

生意気でしょうが、治療者に相応しい「魔法の手」をしていると勝手に思い込んでいる。その手を使って、真の価値を生み出したかった・・ 職人として。

既に56歳にもなって未だ自分の「天職」と思い込んでいる職業の基本もできてない現在ではその夢を改めるべきでしょう:

三流の職人で結構だが、正直で**地(自)道**で何とか頑張る。

前ほどいい夢ではないが、これも悪くない……

---

## 2) Handwerksmeister

手の仕事は学歴マニアに囚われている現在社会で軽蔑の目で見られる傾向があるような気がして仕方ないから、職人を少々称えたい。

無論〇〇をしっかり勉強する事はどこにも悪くないし、様々な技術の発展に伴って「手仕事」の出番も少なくなっている事は否定が出来ないし、そういった技術の非難するつもりもない。しかし幾ら偉い学位があっても、どれ程技術が進んでも「手」や後でもう少し触れる「触れ合い」の代わりにならないと信じる。

ここに古色蒼然たるテーマを引っ張り出したい:ドイツに中世時代からある・今日でも続くマイスター制度だ。もともとそれは同業の職人の組合のようなものだったようだ。お互いに助け合ったり、支えたりするために構築された組織。時代の流れに沿って段々と各職業において教育的な機能をも担うことになった - 一種の師弟関係を通

して弟子を教育する。

最近は色々な変化があったが、伝統的な姿ならば、ある職業を目指す若者が地元にいるその職業のマイスター(=師範)で弟子(Lehrling = 見習い; 直訳苦学では: 習う小僧)になり、場合によって下宿もした。暫くそのマイスターの元で修行して、職の基本を学ぶ。ある段階まで上達したら、マイスターから次のレベルの「資格」= Geselle = 職人と認められる。これはまだ一人前になっていないから、大仰に言うとマイスターがその職人を追い出す。

職人はそれぞれの職業において独特で伝統的な衣装を身に付けて、出身地から歩いて離れる。放浪=歩きながら他の町で同業の作業場=マイスターを見つけると、門前で大きな声で「弟子にして頼み申す」のような事で頼み込む。そのマイスターが弟子を受け入れる余地があれば、職人を下宿させ、宿と食料を補給しながら何ヶ月一緒に働く事になる。その間例の職人が今度のマイスターの特技が教えられたりして、又は観察しながら自分で身に付ける。例えば半年でそうして働いて=学んでから、再び歩き出し、更に別のマイスターを探す。全国を歩きながら複数のマイスターで技術を磨き、知識を増やす。

最終的職人が自分の「腕」に関して十分な自信がある時、その職業のマイスター数人で構成されている試験官の前で今まで習得、または独自に編み出した職人技を披露する。他のマイスターにて認められた場合、自分も「職人」から「マイスター」に昇進し、額に入れられる、自分の作業場に飾られる証明書が与えられる。

マイスターは自分の職人技と自分が職人であることに  
関して偽りのない誇りを持っている。自分の職人技に関  
して職業外部のいかなる人から批判や文句をうけつな  
い。いくら高級なタイトルを持っているであろうと、職人で  
ないと職人を批判する資格がない。大賛成！

因みにここでは職業はドイツ語で "Handwerk" とそ  
れに従事するものが "Handwerker" を言う。とても興味  
深い言葉だ。Handwerk は "Hand" + "Werk" で構成さ  
れている。Hand = 手 + Werk = 作業・作品。いかにも手  
で仕事する人。長年の間で培われてる職人技ほどの機  
械にも、どのような学位にも置き換えられない。誇るべき  
技 = 身分だ。

私もいつかそのような誇り高き職人になりたい！

---

## 触れ合い

職人技の延長線で「触れ合い」もを少々通常の意味  
(人間関係)から外れた角度から考えたい。現代社会に  
於いて外界から情報収集は90%、あるいはそれ以上の  
比率で「視覚」を通して行われている。よって晴眼者はこ  
の世の支配者だと勘違している人は決して希ではない  
でしょう。

本当にそうでしょうか。

視覚、聴覚、嗅覚は大体遠方から情報を収集するためにある感覚だ。触覚は短距離の情報収集に使われる。鍼灸では「目で見て」分かるものとそうでないものがある。人間は元気か病気かが姿や表情などを目で「見て」凡その検討が付くけれども、ツボなどのことは目で見て分かるものではない。そこで「手で診る」＝診察の出番だ。

視覚に頼り切った現代社会に於いて手の感覚どれだけ衰えている事が通常余り認識されない。盲人は指先で点字を読む事を見ると、私は自分がどれだけ鈍感だといつも痛感する。私は点字は読めないが、仕事上ではいつも患者の体に書かれている「情報」を読もうとする。

手の感覚及び運動に使われる脳の「資源」は他の体の部分に比べてかなり多い。世の中のあらゆる物に手を翳したりして、直接触れたりすると「手が脳に何を報告」している事を素直に聞き入れてしまえば、驚くほど広い世界が開かれる。「これは木だ」、「これは鉄だ」のような先入観を捨てて、素直に手の話に耳(脳)を傾くだけ。

赤ちゃんは最初手当たり次第何でも口に入れる。もう少し大きくなると、それこそ「この世は何で出来ている」かを「把握」しようとするため、あらゆる物を「手にする」。手の働きは脳の発達に不可欠の要素だ。ドイツ語では「〇〇理解」する事は "begreifen" と言う = 手に取る事。

---

## 滞在2年半で結婚

東洋医学専門学校入学と結婚は時間的逆だったが、後で鍼灸の話に集中できるため、1981年8月の結婚式を同年の4月の入学より先に説明しておこう。

来日後前述のように色々とお稽古しながら暮らしたが、元々の貯金は無論足りなかった。生活費を作るため少しずつ英語やドイツ語会話を教えた。

ある小さい言語学校の生徒と段々と仲良く、そして最終的と付き合いすることになった。レッスンも学校から私が借りた家へ移した。

ここでは恋愛小説を書いているではないので、細かい所省いて、来日から2年半経ってから、専門学校に入る少し後、結婚する事を決めた。妻の両親は私の顔を無論頻繁に見たことあったが、私の両親がお嫁になる者を見たことないから、結婚するため彼女をドイツにつれて帰った。

私は18歳で基督教を辞めたし、妻は元々基督教ではないから、映画でよく出てくる教会での「結婚式」はしなかった。法律上結婚が町役場で役員と証人の前で該当と書類をサインする事で成立する。だからそれだけをやってきて、後友達数人で食事をしただけ。役3万円で確約の出来上がり。義理の両親は帰国後鎌倉のレストランで披露宴をやろうとした。50人のお客さんと呼んで、一人分は2万円 → 100万円！その数字を聞いただけで私はそれをやらないと反発（再び！）した。

結局披露宴はやらなかった - 義理の両親に恨まれたのかもしれない - 代わりかどうかが分からないが、次のお正月に義理の両親の故郷北海道に連れてもらった。

複数の親戚をご挨拶しながら回った。お正月だから、家へ上がってお正月料理もてなされた。何も裏の事を考えない私は最初の家で美味しく、遠慮なく頂いた。だが、間もないと又出かけて、次の親戚を尋ねた。

同じ事が繰り返す：家へ上がる、お正月料理が出される。しかし、10分前食べたばかりだから、お腹はすいていない。そうすると、その家の主や奥さん：「何、内の料理は美味しくないのか？」そういう訳ではなかったが、まだそんなに流暢に断る「技術」がなかった。一日何度、強制的に、本格的な食事させられてしまい、大変な思いをした。



町役場で結婚証明書にサインする所





役場から出た段階でお母さんと一緒に

## 東洋医道へ

言うまでもなくそれは東洋医学と書くべきだろうが、敢えて私にとってそれは学問よりも弓道と似たような「道」と考えたい。

最初の挑戦は、前述の流れを見れば当たり前の事になる、浪越先生の指圧専門学校の受験だった。二年余り何とか日本語を勉強したが、入学試験は勿論日本語で行われていたので、正直言えば、試験問題はまだチャント読めなかった状態だった。

試験の当日妻も一緒に東京まで来てくれて、試験中外の廊下で待っていた。待っている間学校の関係者が彼女のところを通して、お話しするようになったらしい。そして彼女は「如何ですか」と聞いた時、相手は「何とかします」と答えたそうだ。

第1章で色々とドイツの学校のお話したところではカンニングをした事がないとも書いた。自分の力で成せる事を見たいからだ。例えテスト成績は零点であっても、それも自分の「力」、あるいは責任であって、そのまま素直に受け止めないと少なくとも私個人的は満足しなかった。よって、学校の関係者が言った「何とかします」のは私の理解力でカンニングに相当するものだ。暫く経ってから間違いなく合格通知書が届いたが、自分は納得できない物だったから破棄した。

その後少々考えて、色々な人にも促され、鍼灸まで考慮範囲を広げた。鍼灸も指圧と同様、基本的私の好きな東洋思想に基づいているから、夢や信念を放棄せず理想と考えた仕事が出来ようになるが、指圧より利用できる手技も増え、適応範囲も広くなる。

色々と探したところで戸塚(湘南医療福祉専門学校?)にも鍼

灸専門学校があると分かった。その頃横須賀に住んでいたの  
で、比較的近くで私は最適だと喜んでいて。しかし・・・妻と一  
緒にお話し = 面接しに行ったら、外国人が話しが分からなく  
て面倒から、他に行ってくださいと言われて。自分は十分話  
が分かるようになったと思って言った。

仕方なくまた別の学校を探して、結局渋谷の理学療法専門  
学校と新宿鍼灸柔整専門学校2箇所で行った。両方チャント落第した。次はどうするかと考え始めた  
ところで前者から葉書が来て、「補欠入学」が認められた。この  
際、罪の意識を持ちながら、私の信念に反する行為だと言う  
事実を目をつぶって、甘い誘惑に負けて入学した。

## 新入生の自己紹介

三十年余り前に入学した昼間部の私が入った「クラス」は  
凡そ70人だった。多分最初の授業では自己紹介しようとい  
う話になった。生徒が順番に立って、自分の名前とどうして  
鍼灸を勉強しようと思ったかの動機を簡単に述べた。

ここまで読んでくれた読者がお分かりでしょうが、私は現実  
の世界に住んでいない、虹のかなたにある非現実的な世界で  
理想主義にふけた変人だ。鍼灸と言うものは数千年の間洗練  
された思想(哲学)の基づいている高度の職人技だから、それ  
を身に付ける願望を抱いている志願者もそれなりの覚悟や信  
念に基づいてこの修行を望むと確信していた。

所が、新入生が自己紹介の際で披露された「動機」は人助  
け、人を治したい、社会に貢献したいなどは印象的4割未満  
だった。残りの生徒は次のような、私にはとっっても信じられない

「理由」を述べた。

- 前は牛乳屋さんをやっていたが、店がつぶれて、他にやる事がなかった。
- こう言う商売すると儲かると聞いた。
- 親は「行けっ」と言われたから。
- なんとなく。

そのような話を聞いて、来日当日横浜スタジアムで受けたカルチャーショックと似たような気がした。鍼灸はもっと誇り高い職人の道だ信じたのに・・・

## 前から後ろへ

先の話の延長線になる。入学時点で自分の日本語はまだそれほど確実なものではなかったし、特に日本語で黒板に書かれる事をメモする事は恐らく至難の業(時間的間に合わない)になると予想した。

勉強について行けるため小さなテープレコーダー、当時にICレコーダーはなかった、を買って、黒板の近い最前席を選んで、後で復習できるように授業を録音した。

しかし・・・ 暫く様子を見ていたが、通常の授業を聞いても大した役に立たない事を残念ながら悟らされた。失望感を隠せず、今度部屋の隅の一番後ろの席に移して、片耳や片目で授業の話聞きながら、独自の勉強を同時進行させた。

例外は解剖学と生理学の時間だった。解剖学を教える先

生は自分が世界の最先端の解剖学者だと言い、世界で一番詳しい解剖アトラスを出した、川原 群大先生。生理学を教えたのは、それこそ生理学の学者、当時東海大学で研究室をかかえていた白石先生。

この二人の先生の話は面白くて、それぞれの分野で極めてしっかりした奥深くの知識を何となく優雅な形で伝えてくれたから、解剖や生理の授業に合わせて又最前の席に移した。

両方の先生は私と同じ欠点もあった：**話は年中脱線**してしまう。時々話しの「本線」より脱線ルートの方が遥かに長い。私は現在治療中でおしゃべりをする際も常にそうなるから、年中妻に怒られている。

同じく、この二人の先生は勉強する意欲のある生徒を集めて、学校以外毎週一回定期的勉強会を開催した。それらの勉強会に殆ど欠席なしで参加させてもらった。今日現在までその勉強会で習ったことは学校の授業で習ったことより遥かに上まり、役に立つ。これもまた妙に小中学校の反抗期の光景に似ていると思わざるを得ない。

学校の三年間を殆ど大きな教室の一番後ろ左の角で片方で授業を聞いて、片方で自分の勉強をしている間 - 三年間も！ - 私の斜め前の生徒がずーと寝ていた。実技の時仕方なしで起きた以外に、私は記憶している限り寝っぱなし。しかし、国家試験はそのまますんなりと通ってしまった。誇り高き職人はそんなもんかを見ると矢張りがっかりする。

大分後の話になるが、臨床家になってからたまに鍼灸関連の学会に出席する度似たような風景が見られる。小さい部屋で小回りの発表ではそうでもないが、大きなホールで偉い人が特別講演会などをすると次のような光景がほぼ確実観察される。「お招き頂きありがとうございます」などのご挨拶の直後

に、「スライドお願いします」が来る。当然部屋を暗くされる。仮に講師がとても面白くて興味深い話をしても、だいたい5分以内聴衆の3割か5割が寝てしまう。

何年昔から鍼灸師の教育レベルを向上させるために「認定制度」が導入された。その制度で学会や勉強会に特定な講義に出席することによってポイントを稼ぐ。今は事務的な手続きが少々変わったが、本質的前と同じ状態が続く：講演会が開催される部屋の入り口で聴衆カードを貰って、講演会中自分の名前などを記入して、終了後出口に設置されている箱に入れる。誰か何かの形でそれぞれの人のポイントをカウント・管理し、十分なポイントが蓄積されたら、認定証明書を申し込める。

勉強を促すことをとても大事で大賛成ですが、前述の講演会中ずーと寝ていても、終了後聴衆カードを投函するだけでポイント貰えるようだ。専門学校で3年間も寝っぱなしで過ごした生徒と随分似ているような気がして仕方がない。

## 鍼灸師 - 万能か

現在鍼灸治療の「科学的根拠」は未だ不完全、又は研究そのものが未だ本格的始まっていないから医師や自分を「科学者」と名乗っている者に馬鹿にされることよくある。研究 - 「科学的根拠」の究明は進まない主な理由は医学分野と違って、製薬会社などの莫大な研究費を提供するスポンサーがないだ。

”自分を「科学者」と名乗っているもの”とは敵対心を持った批判に聞こえる表現は次の意味で理解して欲しい: "science = 科学" と言うのは本来 "empirical science" (経験科学)を意味する。つまり、自然現象の観察を通して真実を求める。しかし、鍼灸に関して頻りに科学者が「根拠(データ)はないから、効くはずはない」と言う非科学的な表現が聞かされる。最も派手なタイプは:「俺は鍼治療を信じない」等を発言する。科学は信念と関係ないのではなかったか。根拠が分からなくても治療そのものを観察(出来れば体験)し、目の当たりにするものを評価してほしい。

よく非難される鍼灸師はどれだけ大変の仕事をしているか少々考えましょう。日本鍼灸新報464号、平成12年12月、では第45表として一つの統計が公表された。一年での治療の総数は先ず横に医療施設別(大病院、医院、鍼灸院など)、そして縦に大きく16診療科別とその内48種類の病気別に分類された。一覧表を見ると、「**鍼灸**」に全くかかる「患者」がない項目たった一つだった:お産。お産するのは病気でもないし、矢張り鍼灸の出番はないかもしれない。しかし、陣痛促進や痛み緩和などが色々と「手の施すよう」はあるにしても、鍼灸師は先ず呼ばれないでしょう。

内の子供たちにお産の当日、臍帯を切手色々な雑用を先に済ませるから凡そお産後約2-3時間でお灸をした。肩甲骨の間にある「身柱」と言うツボに小さな艾を3回燃やした。古典(どの古典だと忘れた)に書いてあって、現代風に言えば予防のためだ。だが今まで新生児

にお灸して欲しいといった形で他人から呼ばれた事ない。

その他すべての診療科、全ての病気で患っている人は鍼灸院に訪れる。骨折のある患者は内科にかかると内科の先生は恐らく「専門外ですから整形外科に行きなさい」と言うでしょう。他の病気は勿論同様である。しかし鍼灸師はそれを言えないで、何とか治療を挑戦せざるを得ない。

つまり、鍼灸師は「**全て**」の西洋医学分野を少なくともある程度勉強せざるを得ない。その上に専門となる東洋医学も勉強しなければならない。それはかなり大変な事です。出来れば自分の専門分野で隠れて安心して居る他者＝東洋医学を知らない部外者に、根拠のはっきりしない文句言われたくない。

## 意事に終わった

最後列の席に三年も過ごしてから国家試験を臨み、合格した。未だ在学中学校のある先生に日産玉川病院に代田文彦先生が設立した「東洋医学研究所」があるから、そこに行けば、本物の医療現場で更に勉強出来ると進められた。

1984の四月に理学療法専門学校卒業し、国家試験を合格する事で鍼灸師の免許を獲得したと同時に、同じ四月で日産玉川病院で「就職」した。そこに入るにも試験のようなものがあったが、何とか誤魔化して入れてもらった。その年の志願者は私以外後一名。



## 第4章

### 仕事 - Beruf

日本語でよく「バイト」(本当はアルバイト)言う。アルバイトはドイツ語: "Arbeit"、ドイツでは「お仕事、職業」を意味するが、日本人は私には分からない理由でそれを「嘱託、パートタイムで働く、非常勤」と言う意味で使っている。日本語で言う「仕事、職業」に相当するドイツ語の言葉は普通使わないし、一般的に知られていないが、非常に大事な概念を伝えるものから、今一言を言わせて貰う。

Berufと言う言葉は複数の意味あるが、ここでは所謂「仕事」に関連するものを話の対象にする。そうすれば:「お仕事、稼業、使命感、召命、職、職業など」がでる。ドイツ語では良く Beruf は "Berufung" = 召命から由来するとされる。又は、これは私独自の解釈、"rufen" = 呼ぶ、呼びかける + "be" = かかるからなりえる言葉 "berufen" = 通常では「援用する、起用する、選任する、任ずる」のような意味で使われるが、「御呼びがかかる=使命される」という形でも捉えられる。ヨーロッパ(キリスト教圏)では「神は人に〇〇を使命する」と言った見方だ。

私は国家試験を合格し、鍼灸師と言う職業(= Beruf)を得たのは、上記の意味で "Berufung" = 召命であるように感じる。

微力で有りながら使命感を鍼灸師として実現したい。鍼灸は金儲けの為の手段でもないし、鍼灸師は単なる「バイト」をする訳でもないと言った発言を過去に何度もし、毎度大勢の人に怒られた。

鍼灸と言う職業は誇るべき技術、侮れない知識、そして確たる信念に基づく最終的人助けになる「使命」だと考えている。私は非現実的な妄想を抱いていると非難されても仕方がないだろうが、近年の東洋医学の流行に伴う鍼灸に対する「軽い気持ち」はどうしても賛同できない。

## 多摩川病院 - 稼業開始

「作業開始」はチャントした言葉だが、敢て目に引く変形を使う。鍼灸師の免許を貰った新米鍼灸師は当然何もできない。専門学校における勉強も実技も国家試験を合格するための対象に限られている。学校として「我学校の国家試験合格率は94%」などを次年度の広告用パンフレットに書けるのは宣伝効果もあり、ビジネス戦略だ。

多摩川病院に入る理由はそこにあった：現場で実践的な技術も身に付けながら「本当」の勉強をしたかった。Beruf = 鍼灸師は得たが、マイスター制度のところの説明したように、免許を貰っただけでは "Geselle" 程度のものだ。これから本番。

多摩川病院に入った頃鍼灸師は15-16人ほどそこで勉強した。「病院」って立派そうに聞こえるが、当時例の「東洋医学研究所」は廢墟に近い2階立て木造のバラック＝結核療養所（結核患者もまだその汚いところに生活した！）の名残だった。

公式の教育現場ではなかったが、そこにいる人を入れてからの年数で「分類」されていた:1年生、2年生・・・。



図 27: 多摩川病院で働き始めて間もない内長男が生まれた。生まれた直後。

一年生は小学校の一年生と同じようなものだった:何も知らない小僧の日課は片づけ、手伝い、見学などをこなし、そして毎日診療が終わってかれ夕方 1-2 時間ほど分野別で誰かの先輩に講義＝特訓を受けた。チャンスがあれば解剖の見学も出来た。

何年生と関係なく毎週土曜日の朝、診療の前に全員が集まり、各鍼灸師が原稿用紙 1-2 枚分ほどで自分が担当した症例を発表した。代田(文彦)先生の要望で口頭だけでなく、文章を書いて、読み上げてた後全員それに関して意見を交わした。毎週に行われているこの勉強会は「土曜会」と名付けられ、十数年後で医道の日本誌にその一部が公表されるようになった。代田先生は文章に拘った理由は本人の言葉で言えば「鍼灸師は文章書くのが下手糞から、練習させないといけない」。私の文書を見て、その事実是一目瞭然だ。

二年生になると例のバラックにある複数の治療室のどこかの一角にベッド1-2台分を自分の治療スペースとして貰って、お手伝いよりも自己責任で患者を診察し始める。同時に病棟で鍼灸治療を希望する患者を担当したり、代田先生の内科外来で毎週2回ほどお手伝いの他に、先生が当直する日に治療室で泊まり、深夜救急車で運ばれる患者の処置を救急室で見学も出来た。そして、色々な条件はありながら義務ではな

かったが、出来る限り何度か手術を見学すべきだと先輩も代田先生にも言われた。

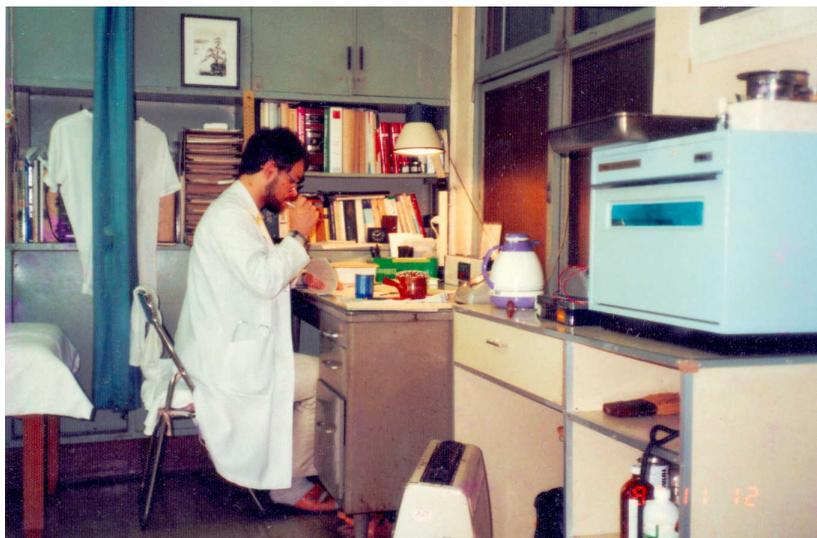


図 28: 多摩川病院で自分の治療区画を貰った時。ここはただお昼の愛妻弁当を食べるところだ。この頃からの写真は殆どない。

多摩川病院は前述のように公式な教育現場ではなかったから、これ以上やらなければならない義務や必要性がなかった。もっと積極的の勉強したいなら、自分で何とかしろっという方式。代田先生自身は鍼灸師に「私は弟子を取らないし、直接教えない。何か学びたい事があれば、それを自分で特定し、質問したりして、教えられる先生を直接頼んで頂戴。」言った。

私はまだ若かったし、勉強への熱心で燃えたから、他の鍼灸師仲間が「やらなかった」か「出来なかった」事を幾つかを挑戦した。

私は当時丁度流行っていた「襟巻キカゲ」のような存在だった事が多いに役に立った。つまり、代田先生はそれなりに

有名だったから、時々外国人(殆ど医者)が見学に来たのは然程珍しくなかった。しかし、訳の分からないドイツ人小僧が日本の鍼灸師免許を取得し、日本の病院に「勤めた」 - 病院として勉強のチャンスを与えるのみですから、給料は略皆無だった - 事は病院の先生方、看護婦や他のスタッフに取ってあの頃テレビに出た「襟巻キトカゲ」のような珍百景のようなものだった。「珍しい」と言う特権を利用して、鍼灸の仲間になかった勉強のチャンスをありがたく多数を得た。

仲間にはなかったや出来なかった勉強のチャンス？周知の通り病院において意義不明の「派閥」がある。ある程度鍼灸治療を認めて、場合によって応援までしてくれている先生方もいたが、最初か物を見もせず「俺は鍼なんか嫌い」と言う先生方もいた。

代田先生中心に味方の陣地に対して、後者のグループは「敵の陣地」となり、鍼灸師は基本的に敵の先生との接近/接触を不文律で事実上「禁じられた」。だが私は「襟巻キトカゲ」だから、その境界線を越えられた。御蔭さまで多摩川病院にいた4年間では大変充実した勉強が出来た。

外人特権を駆使し、代田先生の内科外来以外、歯科(評判の悪い先生だったから)と余分の男性がいると相応しくないと考えられた産婦人科以外、病院にある全ての診療科を回り、個人的に見学させてくださいとお願いした。どの先生も気持ちよく受け入れ、質問まで答えて下さった。「敵の陣地」概念に囚われず、矢張り聞いて見るものだ。

最も冒険的な行為は、敵の陣地の中心人物、いかにも「鍼なんか効くはずないだろう」と言う概念を持っていた心臓を専門とする内科の先生に声をかけ、心臓の雑音を聴診器でどう

聞き分けるかが分からないから、出来ましたら指導して頂きたいと聞いた事だった。その場ではあまりはっきりした応えは出なかったが、後に2-3度廊下で合った時「典型的な者がいるからちょっと来い」といわれながら、入院患者まで連れられて「ほら、ここで〇〇を聞いてみる」との指導を受けた。

仲間にその話をして見て、日本人鍼灸師にはほぼ考えられないそうだった。派閥の意味はもともとわからないものだが、学びたいものがあれば教えてあげべきだと私は思っている。知識はお金と違って、分けてしまえば減るよりも増えるような不思議なものだ。

英語をそれなりに話せるようにもなった事も一つの特権だった。ようするに、日本語が十分分からない外国人が救急車で運ばれた際、院内放送で何度も呼び出されたことある。その中に早産などの産婦人科系のケースも含まれた。自分から進んでお願いした帝王切開の見学を別にして、そうやって産婦人科の色々な処置を見学できた男性(!)は鍼灸師の仲間の内で恐らく私一人だった。

## 手術 - 難問

病院で勉強を始めた頃には血を見るのは大の苦手だった。詳細の話はここで省略させてもらうが、院内で初めて外科的な処置を見たのはお年寄りの男性の背中にある出来物の切開だった。大したこともなかったし血も出なかったが、私はその場で顔を真っ青になり、婦長さん「ほらその端っこの椅子に座って迷惑かけるんじゃない！」と叱られた。しかし、間もないうちに殆ど外科関連の仕事ばかりするようになった。

きっかけは二つほどあった。一方救急車で運ばれてきたフランス人の子供に緊急手術が必要になった。まだ診療時間前に私は出勤した時裏口子供抱えて駆け込んだ外国人がいた。一応声を掛けて見たが、父親も英語然程分からなかった。尊敬する代田先生と一緒に東洋医学研究所の責任者になった内科の本田先生がフランス語話せると思い出して、院内放送で呼び出した。

テレビで見るドラマより現実世界の出来事のほうが遙か迫力あって、手術までやその内容の詳細な事をここでは省くが、朝来院してから何となくその子の面倒を見る事が私の義務だと感じた(勘違いしたに違いない)。最終的本格的な手術を間近で見たのは、あの子で始めて。

もう一つのきっかけは横柄な外科インターン(現在研修医と呼ぶ)の失礼な挨拶だった。ある朝外科病棟の廊下を歩いて、向こうから外科の部長と例のインターンが来た。こちらからおはようございますと挨拶し、部長が「よっ！おはよう」(その先生と結構気があった)と挨拶を返してくれた。しかし、鼻の高いインターンは顔を向こうに回し、「フムッ」と挨拶しなかった。どうやらそのインターンは医者以下の身分の人を挨拶する必要ないと思っただけらしい。頭にきちゃって「このやろう、みてろ」と思った。

実は、私は多摩川病院に入る前にちょっと変わった考え方(そんな事私は言うべきではないだろうが・・・)の先輩いたから、話によると病棟の看護婦から何度もクレームが来たので、鍼灸師は病棟で、特に外科病棟、余り全面的歓迎されなかった。

前述の出来事の後になんかとした研究案を作り、代田先生

と相談の上外科の部長や婦長たちにもお願いした:「鍼麻醉」の研究やらせて貰った。実際鍼で麻醉するまで信頼もされていなかったし、そこまで外科の先生も協力してくれなかったが、症例を胸部・腹部手術群の分けて、鍼治療で術後疼痛をどの程度緩和できるかを調べる事にした。

その詳細はやはりここで控えさせてもらうが、凡そ2年の間に続いたこの研究の結果は全日本鍼灸学会で発表し、後に文章として医道の日本誌にも載った<sup>7</sup>。日本語文が医道の日本誌に掲載された後にこちらからヨーロッパの雑誌のためにあの文章をドイツ語に書き直して、最終的向こうの雑誌にも発表された<sup>8</sup>。その後、私は多摩川病院スタイルで4年生になってから、挨拶されないことは完全になくなった。勝手に思い込んでもかもしれないが、まあまあ人間として認められたのかもしれない。

因みに、例の外科インターンは同様の横柄の態度を患者

- 
- 7 1) 多摩川病院で勉強したことは次の二つの文章で纏めた。  
一方、事前から計画をした研究、もう一方は病院で仕事している内、癌に関して興味を持つようになって、積極的がん患者に対する鍼灸治療を行なった末に、がんに関する勉強した成果や治療を通して得た経験の纏めだった。両方とも少し後でドイツ語に書く直してヨーロッパの代表的な雑誌にも出してもらった。
- \* 外科手術後の患者ケアに対する鍼灸治療の応用(1-2)、医道の日本 1990、No. 549-50
  - \* 癌治療 — 鍼灸師の観点から(1-5)、医道の日本 1989、Nos. 542-7
  - \* (私の調査が不十分でしょうが、1980-1985年頃には鍼灸と癌に拘わる文章・論文なかなか見つからない。
- 8 Anwendung von Akupunktur in der Betreuung postoperativer Patienten  
Akupunktur – Theorie und Praxis; 1990, No. 3, pp 196-245  
Klinische Erfahrungen mit Akupunktur bei der Behandlung von Krebspatienten  
Akupunktur – Theorie und Praxis; 1991, No. 2, pp 67-75

に対しても取ったから、複数の患者が苦情をいった。結果的、前代未聞の出来事らしい、本当は一年ほどいるはずだったのに、3ヶ月で首になり、姿が見えなくなった。

前述のように代田先生は弟子をとらなかったが、医療そのものの以外に非常に大事な事を「教えた」わけではないのに、全ての鍼灸師が毎日目の当たりにした - 患者の説得だ。外来患者にも、入院患者に対しても病状をいかに上手・分かりやすく説明する次第患者の様子が変わる。

ある時、午前中に交通事故で30代の男性が耳鳴りになった人が同じ治療室で仕事した仲間に鍼治療受けに来て、耳鳴りが余りにも気になるから自殺願望を打ち明けた。仲間の先生は危機感を覚え、その患者を代田先生の内科外来を受けさせた。

受信した事は直接見ていなかったが、代田先生は「耳鳴りを気にしても何も変わらないから、気にする事を辞めなさい」と言ったそうだ。訴えた耳鳴りは無論診察の前と全く変わらなかったが、昼食後患者がもう一度治療室に来た際、仲間の先生に「明日一緒につりにでも行こうか」と誘った。耳鳴りは一切変わらなくても、患者が説得された。

## 給料と判子

多摩川病院では給料が手渡された。そのために日本人が大好きな判子が必要だった。私は当然元々判子もっていなかったし、サインは殆ど複製出来ないから今風に言ってみれば、セキュリティ一万年なのに、当時まだなかったが100円

ショップで買った、何千人が同一した判子でないと事務手続きできないと言われた。これを見ると判子を優先的に使いたい人の自己認識 (identity) はどうなっているのかを首を傾げさせられた。

仕方なく、判子を作った。どのようなものが必要かと聞いたら、なんでも結構だと言葉を返された。変ですね。個人的カタカナは余り好きではないので、当て字のものを作ってもらった。今日現在でも治療院で領収書を書くときそこに押す判子だ。

来日してから翌年で一端オートバイを買って、その内かなり妙な若者のグループを知り合った。その内に本日まで付き合い合っている何人もいる。これらオートバイ好きな若者から以前当て字として「東魔巢」=トーマスが提案されたが、色々な人は辞めた方がいいとアドバイスされた。自分で色々な辞書などで調べて最終的に「柔和」に落ち着いた。「柔」は人名であれば「トウ」と「和」が「マス」と読めるそうだ。よって、私の名はトーマス = 柔和だ。

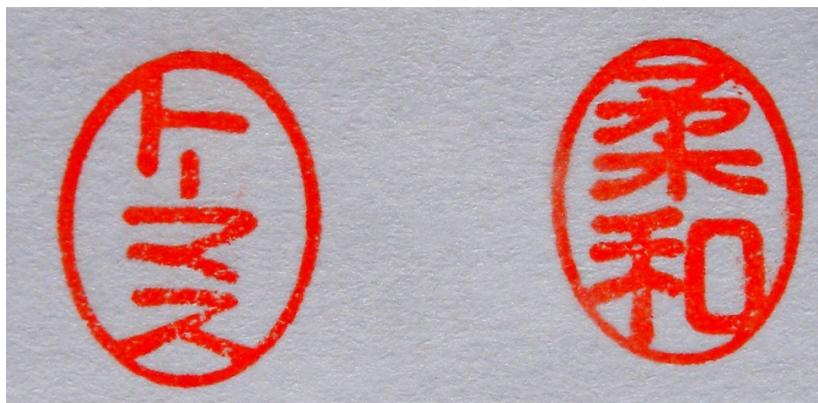


図 29: 私の判子 - 二通り

## 独立へ



図 30: 病院を辞めところ生まれた娘の七五三の時。開業してから約3年

病院で勉強するのは大変ためになるから、大きな意義もあったけれども、生活は出来ない体制だった。あの4年の間に子供3人が生まれてきた。だが1年生として病院から2万円しか支給されず、その中から更に税金が引かれた。毎月の定期代だけでも1万7千円だったので、結局収入ゼロだ。翌

年2年生として月々5万を貰ったが、税金や定期代を引いて手取りは3万以下だった。その後「臨時職員」のような形になったも、4年生で辞めた時、あれこれの手当てを加算されても手取りの「給料」は10万円以下だった。それではやはり小さな子供がいるような家庭は成り立たない。

従って、病院から離れて、独自で生存の戦いに挑んだ。既に辞める前から少しずつ始めた翻訳の仕事をより積極的に探して、徐々に増やした。同時に、開業するのは未だ金銭的に難しかったから何年間往診専門で鍼灸治療も行った。

国家試験を合格する事では「職業」を得た。病院における勉強・実習でその職の修行の長い道の入り口だった。今現在約30年間何となく鍼灸と拘わってきた私はやっと初心者レベルまで昇進し、これから本番だと思っている。捻くれた希望的観測に過ぎないだろうが、現在まだ恥ずかしながら「鍼灸師」と呼ばれている身分だが、将来に鍼灸師を「鍼灸道」に極められたら・・・と言う夢をみる。

若き生意気頃から「道」に憧れ、弓道(=きゅうどう)のために来日した。そして今は鍼灸師から鍼灸「道」へ？「きゅうどう」と「しんきゅうどう」は読み方が同じのは単なる偶然か？又は、弓道の所で説明したとおり：弓道=求道ならば、鍼灸は=真求(道)かもしれない。

昔弓道の先輩に「弓道は一種の生きかだ。実際弓を手にしなくても、その心構えや基本は自分の生活の全てを貫く。」と須原先生から禅語：「歩歩道場」(=どこにいても、何をしてても、全ては修行)を知った。きっと自分はどこか頭が可笑しくて、戯言を発しているだろうが、鍼を手にしたなくても誇り高く職人として鍼灸道の理念を貫くように生きていられたら、人生が完全

に無駄で終わらないかもしれない。

## Long and Winding Road - 閉業まで

病院を辞めた後に横須賀市から葉山町に引越し、その5年後もう一度葉山町内に引越すことになった。二番目の引越は開業のきっかけとなった。



図 31: 何年前の写真。今は外壁が緑になった

つまり、引越しに必要と思った定期預金をおろすか、おろさないかと迷っていた内、結局いらないと分かった時点で既にその定期預金を解約してしまった。失敗したと思いながら160万円を手にした。特別の予定がなければ、それぐらいのお金は(そのとき既に6人家族になって

いた)あつと言う間に跡形もなく消えてゆく性質を持っているので、有意義的に使うため開業にあてた。

周りの「市場状況」など調べた訳でもないし、治療院の位置の最適の場所を選んだ訳でもない。単純に引越した所の近くに小さいなアパートが空いていることに気付いて、それについて不動産で問い合わせた。お金がないからこのアパートをアパート契約で借りたいが、お店として使いたい。(店舗契約の場合家賃はアパート契約の約二倍になり、その上に「保証

金」が必要となる。)幸いに大家さんは私の願いを聞き入れてくれた。

それで決まった。スーパーの近くに相当古いアパートを借りて開業をした。不動産が上記の金額の約半分を持っていたため、必要な準備に関して少々知恵を絞らざるを得なかった。建物が相当古いのであちらこちら窓やドアが歪んでから閉まらないが、それはあまり気にしなかった。6畳の畳部屋と4畳半の「ダイニングキッチン」の他にトイレとお風呂としてちゃんと使えない浴室で全部だ。アパートの前に駐車場一台分。



図 32: 脱衣籠。市販のラタン籠、台、それにキャスターを付けた。ちゃんとベッドの下に収まる。

ダイニングキッチンを待合室、畳部屋を治療室に。大掃除のあとに色々の細かい工夫でこの部屋を使えるように多数の案を練って試行錯誤の作業に入った。



例えば、場所がないから畳部屋の押し入れを少々改造し、今はそれを机、カルテ棚、本棚、ステレオの設置場などとして使っている。

市販の病院用の



カーテンも高過ぎるから、通常のカーテンレールを買って天井に取り付けた。しかし

部屋があまり暗くならないようにカーテンを天井から30-40cmほど下げた方がいいと考え、それに使えるような紐を一本ずつ手作りで用意した。現在でもまだ使っている。

治療道具はとりあえず最低必要な物を購入した。しかし、開業したのは初めてですから、やはり不必要なもの幾つか購入/作成した。勉強になったが・・・

開業してからもよく「ケチ」と言われる程消耗品等もいつも最低限に抑えていた。近くにある横須賀の米軍基地に勤めている患者に頼んで、ペーパータオルなどの消耗品を基地では治療院の近くにあるスーパーの約1/6の値段で購入してもらうことある。ケチ - 格好良く解釈すれば「節約志向」 - にしている御蔭で現在まで治療院を維持できたとも言える。

開業当初私にとって「当然」のことだが、ステレオが絶対不可欠設備と考えた。最初は治療院の近くに飲食店を営んでいる前述昔の妙なバイクの仲間が一部壊れているコンポをくれた。それは多いに助かったが、2-3年間を使っている内に他の部分も壊れてしまった。そして、畳部屋の床が部屋の左右に下がってきたため、大家さんがこの部屋を床にしてくれた際、今でも少々自慢できるステレオを購入した。

音楽の流れない治療雰囲気は私が個人的に好きではない。尚、音楽に関して飽くまでも私が好んでいるものを選ぶ。流行や所謂当たりの柔らかいバックグラウンドミュージック(BGM)は使わない。幸いに殆どの患者が私の音楽のセレクションを誉めてくれる。

そうやって試行錯誤で開業に挑んだ。勿論、開業は揃えておくべき設備の話だけに限らない。倒れかかっている田舎町の古い小さいアパートで髭を生やした変わった外人が鍼を始

めた — それは仕事仲間や色々な道具を購入した日本社の人等に良く「旨いくはずはないぞ」言われた。励ましの言葉を頂いて感謝する！



図 33: この自転車は一つの「トレードマーク」だ。定期的自転車で超える、治療院の近くにある湘南国際村の上から見た眺め。

だがこの文を書いている時開業から18年ほどたっているので、現在葉山町でちょっとした老舗だと自慢が出来るかもしれない。私にとって好きな仕事を自分が作り上げた好きな環境で続けられる事を意味しているのも、それなりの「成功」したことになるような気がする。今ごろ年中町を自転車で走っているあの外人は元町の海近くで鍼やっている者だと大分知られるようになったようだ。



「週刊朝日」年一回出している「漢方」の特殊で取材された。  
2003 年度

当然開業した当初誰も私の治療院を知らなかった。新聞に折り込み広告も出したが頼りになったのは看板だ。ここにも日本人独特(?)の行動パターンが追い風になった:新しい、珍しいものが出来たら - 兎に角一度行ってみよう。

お蔭様で開業したばかりにも拘わらず赤字にならないで済んだ。但し、面白半分で来院した患者の大部分矢張り一回切りで二度と来なかった。私も患者の機嫌取りをしなかったし、営業技術を全く持っていない、そして患者を出来るだけ短い治療期間で改善を目指し、患者本人を自立させたいなどの要素が「続かない」現象に関与したと考えられる。対策に関して多数の人の意見を求めたが、なかなか納得できる形の運営「技術」は未だ実現していない。

逆に経営の面では全くと言ってよいほど話にならない私の治療院は患者からの誉められる事がある。例えば、以前他の治療院にかかったが鍼が痛くて、お灸も熱かったのに、ここではそういうこと全くない、治療受けていい気持ちになる。

又は、複数の病院や他の治療院で長い間に治療を受けたが、症状が余り変わらなかったのに、それが来院して比較的短期間で改善した。そんな事を言われると照れてしまうが、矢張り嬉しい。自分は長年の臨床経験を持っている他の先生方に比べてそんなに上手ではないはずだと思いながら「ああ、有難たい」、春の晴天のような気分を味わう。

私の欠点である「しゃべり過ぎ」の事は意外と好評の場合もある。つまり、患者が来院すると私は問診や診察で分かる範囲内でその病態を患者にできる限り分かり易く、納得し易く且つ詳細に説明する。無論説明の仕方は患者によって違ってくる：30歳の男性と70歳の女性が例え同じ病態を呈していてもそれぞれ納得するには異なる説明が必要になる。多摩川病院で代田先生が常に披露したムンテラ(日本人が作った妙なドイツ語)が必要でもあり、ここに出番がある。

患者が自分の病態を具体的に理解しない限りこちらの治療も納得しないし、得られるべき治療効果も得られなくなると考えている。そこで大勢の患者「こんなに丁寧に説明してもらったことない」と驚かれる。そのような「説得療法＝ムンテラ」は時間が掛かるけれども、大事なことだと思う。

そういう訳で患者から少なくともならず妙な念願が聞かされる：「ここ、流行らない方がいいな。だって、流行ったら私は今のようによくしゃべり過ぎで、貰えないかも知れないでしょう・・・」。

私は自惚れているに違いないが、自分の手に関して「治療



図 34: 新婚旅行はウィーンにも行き、そこで撮った写真。治療院のモット:「昔も今もよく効く、はり・きゅう」と同じく:「昔も今もよくおしゃべり」と常に戒められる。

者の手」をしているだとある程度自身があるから、昔ながらの趣味/思考に基づいて治療者は私の天職だと思い込んでいる。一方翻訳で生活費の大部分を何とか確保するから、治療に関して営業的考慮あまりなくて済んでいる。出来たら鍼灸＝真求(道)を人生の基盤しながら、これから250年間の修行を重ねる事によっていつか真ともな鍼灸職人になる夢を見て、ささやかな希望を抱いている。この「The long and winding road (Beatles)」を進みながら、本業である翻訳よりも天職である鍼灸で身を立てられるようになったら嬉しい。

## 鍼灸師 - 伝統技術の売り出し

ちょっと商売の話題を二つばかり触れておく。

鍼灸治療は本国で1500年間絶え間なく使われ続けた事が、この治療法の臨床効果を立証していると見ていいはず。今更に代替医療が最近ブームになっているから、町中に散見する「宣伝」する必要が本来ない。

個人的の印象ですが、どこにでも見られる東洋医学(鍼灸)よりも正体ははっきりしない、外来語 = ヒーリングやリラグゼーションなどに関する「宣伝」が兎に角「商売っ!!!」と色濃く打ち出しているから品がない。

一度自分の治療院を経営する以外試しに鍼灸師として「アルバイト」を探したこともある。しかし、人材を求めているのは殆ど整骨院や幾分整形外科だ。一箇所で見ても応募して見て、電話で問い合わせた際先ず真っ先に私は「営業」も出来るかと聞かれた。

ここで営業とは = 患者を来させるを意味する。具体的に

言えば、該当の治療院付近の路上でビラを配る事。「らっしやい、らっしやいませ・・・」スタイルで。

私の信念に反し、治療者がすべき行為ではないと信じている。報酬は最初の3ヶ月で時給 **840 円<sup>9</sup>**、後に凡そ1000円。神奈川県が毎月一日に出している「県の便り」によると、840円は神奈川県の最低賃金を下回る。

雑誌やオンラインで探しても、人材派遣会社で問い合わせてもそれは「相場」らしい:時給 900-1000 円程度。人材派遣会社に言われた:それは需要と供給のバランスによるものだ。しかも治療方針や実際行われている治療スタイルは自分としてとても賛同できないものだ。

看護師の時給<sup>10</sup>は通常 1700-2000 円、専門看護師ならそれ以上にもなり、大工<sup>11</sup>さんもそれぐらいかそれ以上だ。なのに勤務する鍼灸師は何の修行や勉強もしないでコンビニのアルバイトと同等の時給を貰うのも事実だ。自分の仕事に関して長年追い求めた理想論や信念を全て放棄する必要があるようだったら、その仕事(→召命=天職)をしないほうがいい。コンビニで働けば同じ時給を貰って、信念や技術の問題/心配なにもないから。

日本に優れている伝統技術が沢山ある事を十分認識されていないため、「各種保険取り扱い」と言う決まり文句=保険診療や最新〇〇療法(正体不明なものも多い)に目が奪われる事が残念ながら多いように見受ける。現在東洋医学の良さ

---

9 神奈川県が発表している「最低賃金」を下回る。

10 [http://nensyu-labo.com/sikaku\\_kangosi.htm](http://nensyu-labo.com/sikaku_kangosi.htm)

11 [http://nensyu-labo.com/syokugyou\\_daiku.htm](http://nensyu-labo.com/syokugyou_daiku.htm)

に注目し、国民に比較的頻繁に使われるようになったのはどちらかと言うと欧米の方です。

各種保険取り扱い＝格安保険診療 → 一部(例えば右ひざ)は幾らと言ったスタイルで治療をする。左記の例で言えば右ひざは仮に370円の治療費であれば、頰も痛いと言って治療してもらおうと別料金になる。まるで自動車修理工場のようだ。人間は常に一つであり、部品ごとや診療科別に一部だけを診るものではないと言う東洋医学の基本概念を完全放棄してしまう。だがまるで視野欠損障害を持っている「(見)診方」すれば、右ひざに症状があるのは分かるけれども、その症状の原因は骨盤や方、歩き方などにあるのはそれこそ視野に入らない(水戸黄門の紋章のように)。症状の現れる所だけを治療すると改善する見込みは然程ないが、それはビジネスの基本：患者を兎に角通わせる。保険診療は格安かもしれないが、治しもしない治療をいつまでも続けると日本鍼灸新報、2013年2月号に出た表で見られる医療費総額の内無視出来ない割合が「無駄」と称されざるを得ないだろう。

日本は伝統な宝物の宝庫である事が忘れられ傾向も残念だが、特殊の技術やサービスを利用することはどうしても一定の値段が付くのも自然だと理解されず、こう言った宝物を放棄してしまうのも嘆かわしい。

今風どこ見ても「治療」＝ビジネスと言う概念が流行っているのはどうも賛同できない。

治療するのは治療者にとって召命であって、営利目的の活動ではない。

しかし、そう言う意見を公で言いつつも「異端者」として取り

扱われる。

更なる異端者の意見:患者は患っている者!お客様のよう  
な「患者様」ではない。患っているからこちらの能力にある限り  
助けるべきだ。

患者を助ける「方法」や「概念」も又沢山ある。東洋医学に  
おいて本来患者をとりあえず丸ごと=全身+精神を診るべきだ。  
上記の保険診療における「普通」は身体の一部を診るごとに  
治療費を幾らかを請求するのは2千年以上の伝統を踏み躪  
るような行為だと思う。

先日恐らく典型的な治療院を見学した。時間厳守方  
針に基づいて治療内容が極めて細かい「メニュー」に分  
けられた:時間は30-45-60分等、分単位で区切られ、  
それに相当する治療費が5円単位で設定されている。  
概念:患者が「30分」分のサービスを購入するから、治  
療側は正確30分のサービスを提供する事。その30分  
の治療は問診、着替え等を含む。この患者(様)はそれ  
以上の治療が必要としても関係ない。

更に、患者が来院すると手が空いている先生に「治  
療」される。治療者は沢山の症例を経験出来ると勉強に  
なるそうだ。

しかし、東洋医学において患者-治療者の間に親密  
な人間関係が築くのは基本で、ちゃんとした治療にも不  
可欠だ。ここで言うまでもないが、五行説によって五臓  
六腑=身体の要素は必ず精神的の要素と連携している  
し、「治療」は必ず肉体的と精神的な面を含む包括的で

行うべき。患者が来院するごと別の治療者に診て貰うならば、その度に自らの精神状態を治療者に説明し直してしまうのは考え難い。まして、カーテンでさえ区切りのない大部屋では・・・

再び東洋医学の大事な特徴を放棄されてしまう。

来院する**患者様**の数は**患者様**が満足しているを裏付けている。ならば、「**患者様**」も東洋医学の良さの破壊/放棄に関与していると結論せざるを得ない。

私は馬鹿だから仕方ないだろうが、「治療」とは来院した患者に必要なものを全部施す事だと思い込んでいる。治療は身体+精神を含む包括的行為で、患者が購入する時間ではなく、必要な時間だけで実施すべき。そういう意味では「治療」と流行の「ヒーリング」などの軽い気持ちの「医療類似行為」が異なる。

単純な症例では比較的短い時間 — 私の感覚では最低40-60分の事 - 難しい症例はより長い治療時間が必要。終わるまで何分は設定しない。特に精神的の問題があれば「治療」より「お話」がどうしても長くなる。私はお話が治療の不可欠の一部だと考えている。代田先生の説得技の影響だろうか。

治療は常に一つ。つまり、一回の治療は幾ら(私の場合4000円。無料で提供したいが、家賃を払う内やはりその分を何とかまかないといけない)。時間と関係ない。患者を治療するのはこちらの使命だから、一つの治療は「作品」のようにマイスター(の手前身分)として完成させなければならない。常に同業者に怒られる考え方だ！

同じく同業者に怒られる行為は:患者に何か(鍼、艾等)を販売→どちらかと言えば「分けてあげる」する際、品物を原価の引き換えで渡す。儲けようと思っていない。

それは自分が悪い。明らかに。

でも、今風の東洋医学(の良さ)を叩き売り / 売り出しする事には賛同出来ない。

何十年を掛けて培われている専門職の技術を全く評価されない(例の時給 900 円)のはそう言った専門職を馬鹿にする事を意味する。私の事ではなく、真面目に東洋医学を営もうとする者。

職人を馬鹿にしているのは当然先ず行政→鍼灸には保険が使えない。(お言葉ですが、私は柔道整復師が鍼灸師の百倍の知識/技術を持っているとは信じられない。

そして、忘れたはならないのは・・・「患者様」！！患者の要求は市場経済において「需要と供給」のバランスを支配するから、格安の保険診療の重要があるからそちら方面の「治療」は大繁盛するが、手間とそれに伴う料金が掛かる伝統的な職人技は置き去りになる。前述した通りの鍼灸師の給料が需要と供給のバランスのために最低賃金を下回る。

30分のサービスを購入したり、兎に角安上がりの商品(＝治療)や意味不明の「癒し」や「ヒーリング」に夢中になっている間、気が付かぬ間に目前にあった、自国の伝統的な技術をなくなってしまう、舶来の安物に置き換えられる恐れある。その内に鍼灸治療を受けたいならば、欧米に渡るか中国風の拷問治療(私は個人的に思う)を受けることしかない。

現在多数の業界に亘り、「安く、安く、もっと安く」が求められている間、日本の確かな技術と品質を提供してくれる中小企業が片っ端から潰れ、最終的に品質の悪い、チャチな中国製海賊商品をしか手に入らなくなる。

私は外人だから何も分からない(よく言われる事!)が、こう言う時代の流れを見ると心が痛む。

## 珍ぶん漢ぶん

個人として世界に分かるように日本の鍼灸や漢方をアピールして欲しい。

時々漢方や鍼灸関連文書をアメリカで発行される雑誌で発表するため翻訳するが、ここにも妙な問題が出てくる。鍼灸の問題を一旦おいてきて、先に漢方の話をする。

日本で漢方に関する最も権威のある学会が漢方薬のアルファベット表記を決めているようだ。例の雑誌も又漢方薬名の「書式」は上記の学会の推薦に基づいて規定してしまうが、下記の例を見れば明らかに、意図的だとしか言い様がなく、誰にも分からない形になっている。私は何度かそれを変えるべきだと言ったが、無意味の批判として却下された。

学会の HP より:

Objective:

The intention of the society is to hold research presentations

and **seek communication**, tie-up and promotion concerning oriental medicine and **contribute to the progress and dissemination of oriental medicine**, and thus contributing to the development of scientific culture.

勘違いしないように・・・「漢方」は一応昔中国から日本に伝来したお薬やそれぞれの生薬を「日本ではどう使うか」の話で、中国本土で同じ物は中国風に使っている事は「中医学」と呼ばれている。ならば、日本の概念をいかに欧米人に伝えるかの問題がここに浮揚してくると私は認識している。

例:

- 漢方薬名: 桂枝茯苓丸料加ヨク苡仁 = けいしぶくりょうがんりょうかよくいこん
- アルファベット keishibukuryoganryokayokuinin (29 文字)
- 中国語: Gui-Zhi-Fu-Ling-Wan-Liao-Jia-Yi-Yi-Ren
- 英語: Cassia Twig and Tuckahoe Pill plus Coix Seed
  
- 英語は「なるほどね」
- 中国語: 少なくともそれぞれの漢字(殆どの欧米人は漢字読めない)の間の区切りがあるから何とか分かる(辞書で各文字を調べられる!)
- アルファベットで表記された日本語: これはどう見ても理解出来ません!
- 漢字を見せないでこの文字列を日本人に見せて(実験済み)「分かる人」は少ない。日本語を全く分からな

い外国人は・・・絶望的だ！

学会はこの表記の仕方を決めた根拠キット何かあるに違いないが、基本的横文字思考の私にその表記の仕方は **★ 意図的に分かりにくくされている ★** にしか見えない。

下記の例(実際翻訳された文章から)ではこの「単語」が 22-34 文字もある。英語でこれほど長い単語をかなり苦勞して探さないと見付からないだろう。あつてそして読者がそれらの単語を読めたとしても違和感を覚えるに違いない。

- Prescription: Hangebyakujutsutenmato 22 文字
- Prescription: Bukuryoingohangekobokuto 24 文字
- Prescription: Ryokeijutsukantogotokishakuyakusan 34 文字
- Prescription: Keishikaryukotsuboreito 23 文字
- Prescription: Tokishigyakukagoshuyoshokyoto 29 文字
- Prescription: Yokukansankachinpihangegotokishakuyakusan 41 文字

例の雑誌(別の雑誌も大体同じ)の趣旨である(漢方に関して)国際理解を深める努力は水の泡になるだろう。

表記の仕方を変えるのならどのように変えるかは私の論じるべきものではないが、例えば上記の例:

”Keishikaryukotsuboreito” において横文字思考の人に当たり前のように、論理的の区切りが見える:

- Keishi = 生薬
- Ka = 加工方法
- Ryukotsu = 生薬

- Borei = 生薬
- To = 薬の形

上記の「区切り」はそれぞれ「言葉」に相当する。適切な辞書があれば、それらの言葉を捜せる。区切りをこちらから提供しないと、日本語が分からない人ならその文字大蛇をどこで切ればいいのか分かる筈もないし、辞書があったとしても使えない。

前例の "Keishikaryukotsuboreito" を使ってもいいですが、もっと簡単な例を私の身近な所から紹介しましょう。

治療院の近く信号機に最近「流行り」の道路標識に日本語と「横文字」も表記されている。日本人は当然その日本語を読むから、横文字分は外国人(観光客?)のためであると想定している。志は外国人がもっと簡単にいきたい所が分かるための努力だと信じたい。

しかし、少々問題あり！

例えば:「葉山元町」→ "Hayamamotomachi" となっている。

「葉山元町」は一つの名所でありながら日本人が当然「葉山」と「元町」は別々の「言葉」として認識する。

では外国人はどうなるだろう？もし辞書で調べたい日本語分からない人ならば "Hayamamotomachi" はどこで切ればいいだろうか。



- Haya mamoto machi?
- Hayamamo tomachi?
- Ha ya motoma chi? ...

相手にとってどれも同じからやるようがない！！！！

だったら日本人が理解すると  
同じ形にすれば自然だろう：

"Hayama Motomachi"

- "Hayama" 固有名詞、探せば地図などで出てくる
- "Motomachi" 名詞、通常の辞書で探せば出てくる。



まだ日本語の文字を読めない外国人向け日本語教科書に：

Korewaookiteburudesu.

或いは

Kyowaiiotenkidesukaraosanponidekakemasu.

と書かない筈！！（上記の「言葉」解読出来るか？

私はきっと大変迷惑な喧しい者に違いないが、もし英訳の目的は ”dissemination of oriental medicine（東洋医学の普及）”であり、漢方を日本人以外の人々に紹介/説明/推薦する意味するならば、その人たちが何となく理解出来るような形にする必要があると痛感する。

### 追伸:

英文におく長い単語を探したところでは以下のものがあつた:

[http://en.wikipedia.org/wiki/Longest\\_word\\_in\\_English](http://en.wikipedia.org/wiki/Longest_word_in_English)  
Longest word in English

その記事では幾つの例が挙げられているが、「最長〇〇語は・・・」と指定されている言葉は27-30文字程だ。シェークスピアの作品のもっとも長い単語は "Honorificabilitudinitatibus" 27文字)だが、先ず一般庶民は無論知らないだけではなく、発音でさえできない。スーパーカリフラジリスティックエキスペリアリドーシャス (Supercalifragilisticexpialidocious)は、1964年の映画「メリー・ポピンズ」の劇中で歌われる楽曲の名前、34文字。先ず一般庶民かなり練習しない限り言えないものだ。

技術系(ここでは医学系)の文章を扱う際、認識・理解できる言葉の長さは20文字かそれ以下に抑えたら意味が伝わるだろう。"Yokukansankachinpihangegotokishakuyakusan"は無

意味、理解不能の戯言。

漢方薬はどうして理解不能な形でなければならない理由はどうしても見えてこない。私として日本式の東洋医学を積極的世界の舞台に出て欲しい。そのため先ず(日本人)自ら言いたい事を相手にしっかりと伝わる形に表記(表現)するのは絶対不可欠条件だ。

## 鍼灸関連

鍼灸に関しても長年翻訳している間「日本風」の用語を使わず「中国風」を使う習慣に悩まされている。日本の文章で日本における鍼灸の状況や技術を日本の「宣伝」として海外で発表するならば、私はそこに日本風の表現を見てみたい。

経穴に関して漢字が読めない外国人向けに WHO が設定した経穴名に相当する郵便番号のようなものを使うのはしかたないかもしれない。例えば足三里は ST36 として出てくる。海外の人達はそれで何とかするらしいが、私は何度覚えようとしたが、いつまでも「イメージが湧いてこない」し、中国風の表記 "zusanli" も今一つぱっとしない。特に経穴の字の定義が異なるからイメージも概念もずれる。

足三里の「里」は日本では凡そ 3.3km に相当するが、中国には時代と用途によって少なくとも三種類の「里」がある: 500m、1km と 1.5km に相当するものがあるようだ。ならば: 「三里(訳 10km)ほど歩いてしまうと膝のした(前頸骨筋の頭)辺り疲れてくると、お灸で疲れを取れる」との説は一里が 500m にしかないならば合わなくなる<sup>12</sup>。

---

12 それを鍼灸関連の辞書を出したアメリカ人に示唆した際、相手の秘書

または、「得気 = tokki」ではなく "de qi"になる。特にこのような用語に関して中国人が言う得気 は日本人が考えている得気と言う現象は本質的異なるような気がする。海外の専門誌で日本式表記も見かけることある: "Hinaishin" =皮内鍼。こうやって日本の特徴を述べる際やはりもう少し日本風の表現を使うべきだ(私個人の希望的観測)。

因みに、「言葉の壁」は一般分野より東洋医学において更に深刻だ。上記の「適切な辞書があれば・・・」だが、私は調べた範囲では現在韓国人が編集した一冊の小さい文庫本程度の和英辞書しかないし、横文字に書かれている「日本の(鍼灸)治療技術」に関する本も妙に偏っているような気がする。

日本の技術、伝統、知識など世界の人々に知って欲しい価値は十二分あるから、日本で(鍼灸に関して)何が行われているかをもう少し「海の向こうの人」(=全世界!)に分かるように伝えて欲しい。既に20年ほど前からそう言い続けているが、今まであまり聞く耳がもたれなかった。日本国・人がほぼ黙っている・自分の資料を外国語に翻訳しないから、積極的自分売り込んでいる中国が東洋医学の知的財産を独占する権利があると主張していて、そして他の情報が乏しいから世界中の人々がそれを信じてしまう。私個人の意見はどうでもいいですが、この状況で最終的損するのは日本国・人だと思う。

(最近領土問題などの関連で日本の資料を翻訳すべきだと危機感が持っている人も現れている。私のブログ → <https://nyuwa.wordpress.com/> にもそのような文章を掲載している)

---

から「あなたみたい馬鹿な人ともう話しはしない！」と言われた。

## 情報の鎖国時代は今尚

以前から日本の鍼灸に関する本(資料)を英訳などにすべきだと思っている。数年まえ色々あったが、それこそ外国人見学者が先導的になって、形井秀一先生の本を英訳する事を発案し、複数の出版社まで連絡してくれた。そして私は全日本鍼灸学会のため、ヨーロッパで行われた学会を視察しに行った際、現地で出版社の何人の代表者と相談したが、「日本の本(資料)を英語・ドイツ語に翻訳し、出版する興味あるか」と聞いたら、いつも明答が帰って来た:ない!

出版社は本を出すのは商売から、売れそうもないような本などは金銭的な高いリスクになるから最初から手を引いてしまうのも分かる話だ。何かを翻訳するなら、中国語の資料が優先的に考慮される。

先日ある人に今風の電子ブック版は自分の名前で、出版社なし、で出せるし、印刷のようなお金がかかることも心配ない。そこで私の治療院見学しに来たアメリカ人が代田文誌先生やその恩師である沢田先生の資料(本)に興味あるから、翻訳して欲しいと頼まれた。

代田文誌先生の「鍼灸真髓」の著作権は 1941 年となっているので、今頃切れていると思った。所が、出版社で問い合わせたところ、著作権は代田文誌先生の死後彼の息子である代田文彦へ譲られ、そして今代田文彦先生の死後奥さんが持っている。仮にその本(それは翻訳の「仕事」よりボランティア活動だ)こちら勝手に翻訳し、電子ブックとして出したいくて

も、複数の「権利」が絡んでいて、「難しい」 = 要するに不可能だといわれた。著作権は大変重要な権利だが、このような事情は情報の鎖国が続いているだとの気がした。残念。

情報発信、言い換えれば自己紹介はしないと、日本語を読めない人々 = 世界中の殆どの人、にとって日本はいつまでも掴みどころのない、ブラックボックスだ。それに対して中国は所謂「伝統中医学 = TCM = Traditional Chinese Medicine」を世界に売りつけるのは国策している模様だ。

ただし、今まで複数の人(欧米系)からの証言によると、中国に亘ってそちらで鍼や漢方を勉強した・するが、これはいかにも伝統的な知恵の伝承よりも商売だ。一時間(レッスン?)は幾らか。お金は何より先らしい。

そして、今更言うまでもないだろうが、伝統中医学は伝統的ではない。1950年代政治プロパガンダとして過去の東洋医学的な治療法 - 党の方針・政治目的に反しないものに限る - を抽出し、西洋医学的の要素で混ぜて、適当な煮込みを作って伝統中医学として売り出している。

何かの形(党の方針・政治目的)で都合の悪いものは廃棄処分された。中国では全ての情報が操作されているのは全世界(中国人以外)が知っている秘密なので、東洋医学に関するものだけは例外扱いされている事が極めて想像し難いだ！

## 外国人見学者

私の HP は日本語、英語とドイツ語の部分ある。横文字の文章があるから、時々海外でどなたが偶然にそれを見つけて、

日本における鍼灸に関する問い合わせが来る。前述のように世界中の人々は鍼灸＝中国だと思い込んでいるから、鍼の事を勉強したいならば、先ず迷わず中国へ行くだろう。



図 35: 二人のオーストラリア人。3.11 大震災の真最中日本で見学中だった。写真は震災の数日前。手前の男性は震災の体験にも拘わらず、今(2012-13年)再び研究のため日本に来た。

しかし、既に何かの免許をもって、一端中国風の鍼を勉強・実践してみたが、不満があるか、さらに勉強したいか、中国風より噂から知っている日本風の鍼がいいと思っている外国人がいる。それらの外国人は意図的  
中国ではなく、日本で(!)鍼を勉強・見学を希望している。

そう言った人から問い合わせが来ると、もう十数年前から何とか見学や勉強出来る場所を探すことを応援する努力している。だが、私は全く社交的ではないし、顔も広くないので知っている人、協力してくれそうな人を片手で数えられるほどしかいない。

## 自信が乏しいのかな・・・

ずーと昔から見学出来る場所ないでしょうかと日本鍼灸師

会、全日本鍼灸学会、複数の学校などで問い合わせた際、常に門前払いされた。余り何年も喧しく言い続けた影響あったかどうか分からないが、2009年6月で "2nd JSAM International Symposium on Evidence-Based Acupuncture" と平行に行われた全日本鍼灸学会の総会において「外国人見学希望者を積極的受け入れる」議案は正式採択されたが、今でも会員の殆どは興味を示さないか、協力を躊躇する。

全日本鍼灸学会は日本国内の最大で最も権威のある鍼灸関連学会であるとされている。協力して下さる先生方が JSAM の HP で掲載され、十数名いる。協力して下さる事に関して大変感謝しますが、会員全体として略100%中々賛同して下さらないか、それとも拒否しているかが分からないが、日本の素晴らしい技術や伝統を世界に披露するチャンスに対してそれほど無関心である事は少々空しい思いだ。

<http://en.jsam.jp/contents/020000t6JBM3/>

学会の HP に協力して下さる先生方の数は1-2年経っても寂しくて二桁まで達さなかったから、本来その資格がないのに私自身も登録した。

つまり、会員の内99%以上は「面倒くさい、興味ない、外人が嫌い、外人が怖い、英語が分からない、見られるのは恥ずかしい、自分の技が盗まれると心配している」(直接頼んだ際何れも実際に言われた理由である)と解釈出来るでしょう。これでなぜ私は良く嫌われている・怒られている事も十分理解出来るようになる。

もし日本人はどこか外国で何かを見学、勉強しようとした際99.8%の確立で「面倒くさい、日本人は怖い、日本人が嫌い(これはあり得る)、日本語が分からないからだめ、自分の技が

盗まれる」などの理由で断られる可能性はどれほどでしょうか？

私は常に「外国人向け」の情報発信として→「日本は実に多彩な技、スタイルなどが見られる「宝島」である。是非一度来日してみてください。」と宣伝している。日本人に是非とも自信を持って、日本の良さを世界に披露して欲しい。

## チャンス

以前外国人を見学させる事に関して協力をお願いしたある先生から次の件が言われた。外国人見学希望者を受け入れる事に関して協力してもいいが、過去の経験に基づいて少々の懸念もある。本当に勉強したいとそうでもない人がいて、態度が悪くて、そして日本で仮に一日どこか(偉い)先生で見学するだけで、後に自分の履歴書に「日本留学/〇〇先生の弟子」と出張する人がいるから困る。

それはきっとあり得るだろうが、今まで私、そして言ってみれば歴史を通して全ての治療者はいつか、どこかで誰かの世話になって、自分の「チャンス」<sup>13</sup>を与えてもらった。その中に歴史に残る偉大な先生もいたし、落第生もいただろう(後者の方が多かったに違いない！)。

- 私は自分のチャンスを貰った。今はその恩返しするチャンスある。

13 <http://www.einklang.com/Foreign%20s>



- 頼みたい事はこれだけです:求めている人にそのチャンスを与えて欲しい。
- 事前に「誰が有望であるか」も分からないし、後はどうなるかも予想出来ない。
- 出来るのは自分が与えてもらったチャンスを次の人にも与える・・・
- 

面倒な外国人を受け入れて、日本人にない発想に基づいて質問されたりすると、日本人も必ず何か、日本人同士で生まれてこない見解、閃きや他の「いい事」があると確信している。

## 悪い事してしまった・・・

自分も妙な外人だと時々忘れてしまう。

前述2009年で行われている国際シンポジウムと平行開催されていた全日本鍼灸学会に出席した際の出来事。「国際」の会議であったため、当然何人かの外国人もいたし、シンポジウムの発表は全て英語で行われた。

シンポジウムの翌日全日本鍼灸学会において口頭発表の他に「ポスター発表」が行われている会場にも行き、ポスターを見ながら少々考え事に更けた。

その時脇から若い男性が近寄り、"Unfortunately everything is in Japanese" (残念ながら全て日本語ですね)と声を掛けてくれた。それに対して私は思わず「だから？」と答えた。

男性が機嫌悪そう帰ってしまい、彼の背中を見ながら「あらっ、まずかった」と思った。

相手はきっと外国人（日本語を読めないことを想定しながら）に親切してあげたかったに違いない。なのにあの不細工で無礼な返事貰って間違いなく外国人に失望しただろう。

ごめんなさい。そのつもりではなかった。ただ、考え事をする最中に十分の速さで思考パターンを切り替えられなかった・・・

## 日陰者

私は植物人間だ。この言葉を使うと嫌われるが、私の「生態」を表している。青年時代にも友達より旅行する事が非常に少なかった。人生一度だけにしかありえない冒険に出かけ、夢を追って世界を半周して日本まで来た。その後、何度も引越したが、いつも極めて狭い範囲内だけ：鎌倉→横須賀→葉山(町内で数回)。つまり、遠く移動してある場所に辿りついて、根を下ろした＝植物人間だ。



青春時代で最も好きな著者は **Hermann Hesse** だった。彼の言葉をかりるなら、「故郷」は一つの特的な場所ではない。ある時、ある条件の下で心が安らぎが得られるなら、それは故郷だ。単純で故郷と言う言葉を使えば、私の故郷は来たドイツの海近くにある。生まれてから既に56年の間で今まで海岸から離れた所に住んだことはない。葉山町も海に面している。生まれ故郷はたまに懐かしく思うが、私の今の故郷はここにある。

根を下ろした植物人間として、私は普段何処にも行かない。葉山から逗子、凡そ5km、間で行くのは旅だ。横浜まで足を伸ばすことは海外旅行に匹敵し、そして東京まで行くのは宇宙旅行だ。よく自転車で昼休み中40－50km走ることあるが、それは特的な場所まで行くのでなく、単にどこか折り返し点まで行って帰って来るだけ：一周を回る。



図 36: 日陰者として山に隠れて暮らしながら「瞬間移動」の修業中・・・  
(冗談)

自転車で一周するとよく、その時に限って連絡取れないから困るといつも怒られているから、私は大嫌いな携帯電話も持つことになった。しかし、私の植物人間としての生活様式は "mobile" より "sessile" なので、24 時間中 90% 以上の時間帯治療院か自転車で 10 分ほど離れている自宅で連絡出来る。移動式 (mobile) の連絡手段はいらない。常に roots のある所にいるから。

## ガラ系

子ども達は良く私が「ガラ系」だと言っている。初めて聞いた時「ガラ系」でなんだと聞いたら、それは「ガラパゴス系」の事。

ガラパゴス諸島は隣接の大陸から大きく離れているから、他の種や環境変化にあまり影響を受けず、独自の進化が動植物がいるようだ。

日本には多彩な流派やスタイルあるが、私はその中に特別の何かを貫いているものもない。鍼灸に関して無論ドイツでは何も習っていないが、来日してからでも特に〇〇先生の弟子になったわけでもない。

悪く解釈すれば、私は例えば経絡治療を行うには頭が悪すぎて無理だ。いい方に解釈すれば、回りの世界から孤立した無人島に住んでいるから、独自(?)のスタイルが生まれつつ(これからたった数世紀しかかからない)かもしれない。今流行りの「標準化」にも賛同できず、それこそ「流行」=「流れ」から外れてしまった。何でもかんでも標準化してしまうと保つべき多様性がなくなる恐れがある。変わり者のアインシュタインは次の私が好きな言葉を残した:

**"A man should look for what is, and not for what he thinks should be."**

いかにもその通り。

「外人」= **outsider** = 「外にいる人」として日本人が普通大勢が極めて狭い空間にいながら、凄く忙しくしている状態から幾分離れた所から物を眺めているからこそ、忙しい人が見えないうちが見えることもあり得る。

そう言った妙な、何も分からない外人の戯言は日本国・人にとってどうでもよいし、こちらから口を挟む権利もないだろう。だが、その戯言は誰かの若者にとって「参考になった」事になるとしたら、それ以上嬉しいことはない。

私の人生は、これから200年間修行する予定を除いて、消えはじめてる。時期にロウソクのように完全に鎮火する。残りの命は(植物性)日陰者として、日々静かに夕日を見ながら過ごして、成るべく皆さんに迷惑を掛けないように努力する。



図 37: 正月2012年の家族写真。子供が全員成人になって、私の役目が終わった。後は静かに余生を送るのみ。

## 後書き

元々「自分の手で世界を変えたい」と言った夢を見たが、今になってそれは無理だと良く分かった。地元の地域でさえに影響与える力がない。これから大きな仕事が成し遂げる予定もないし、子供たちは皆大人になったので、私の役目が終わったようだ。

鍼灸に関しても何か独自の凄い技を編み出したりもしないし、業界を驚かせるほどの学識もない。自分を少し褒める(他誰も褒めてくれない)ように言えば:今まで鍼灸治療で生活費を稼ぐ必要がなかったから、自分自身が正しいと思ったものを追い求められ、実践出来た。

言葉の遊びをすれば:自分**自身** = **自信** = **自心** → 全部「じしん」と読む。何かの流派、恩師などの義理がないから自分自身を見つめることが出来た。業界との繋がりが乏しい(ガラ系)方だからこそ幾分の自由さ得られたかもしれない。

色々な人が恐らくこの駄文は不適切だと感じ、若しくは攻撃される気がするから、私はきっと怒られるでしょう。しかし競争が嫌いな私には誰にも攻撃や非難したつもりがない。何しろ、私はこの国に、自分は第二の故郷だと思っけていても、飽くまでも「外人」=外の人=関係ない人→お客さんだ。34年滞在してもそれは然程変わっていない。

日本に「変」な事があつたり、行われたりしても私は部外者として個人的な意見を述べてまでだ。だが部外者は内部の者とどうしても観点が異なる。私の理に叶わない考え、例えば言葉遣い、指摘が何にかのきっかけで刺激となって、変革と繋がるようであれば極めて嬉しい。

今まで翻訳の収入で生活してきて、鍼灸は常に理想主義に基づいて行った。元々鍼灸を「商売」として捉えていなかったもので、今更天職だと思っけているものを売りに出す気は毛頭ない。鍼灸は少なくとも部分的「人助け」だと信じている。

「人間は病の器」と言う諺通り、人間は必ず病気になる。従つて、国民がいつか必ず医療の世話になる。一旦医療施設=店に入つたら、そこにある「商品」=治療・薬などを買わざるを得ない。これを「医ービジネス」と称すべきか、それとも今風なんでも横文字でないと迫力がな

いと考えられている時代では「e-business」(この"e"はきっと "Everybody gets sick-business")か。いずれにせよも医一ビジネス = e-business = 「良いビジネス」だ！

良いビジネスであったとしても、私はその「脈」がない。そしてそう言う私の信念に反する渦に巻き込まれないように極力気を付けたい。

「気を付ける」 - 拙文の最後の傑作だ。そもそも「気」とは何かだれも分からないのに、それを「付ける」。あの正体不明な気をどこに付けましようか。



図 38: 森と神社の上だけ雨が降っている

## 参考になる・なった本:

- タイトル: ジム・ボタンの機関車大旅行 (ジム・ボタンの冒険 (1))
- 著者: ミヒャエル・エンデ
- 内容: 機関車の大好きなジム・ボタンは親友の機関士ルーカスとともに、ふとっちょ機関車エマにのって冒険の旅へ。
- 本の情報: 岩波書店、ISBN-10: 4001109980
- 発売日: 1986/6/25
- タイトル: ジム・ボタンと13人の海賊 (ジム・ボタンの冒険 (2))
- 出版社: 岩波書店、ISBN-10: 4001109999
- 発売日: 1986/6/25

- 
- タイトル: Die Philosophie Chinas
  - 著者: Richard Wilhelm
  - 内容: 中国哲学古典 5冊
  - 本の情報:

- 
- タイトル: シツダルト

- 著者: Hermann Hesse
  - 内容: お釈迦様の話
  - 本の情報:
- 

- タイトル: ガラス玉遊戯
  - 著者: Hermann Hesse
  - 内容: 実在しない世界・時代に於ける知識を求める・使う人。教育の概念を巡る話
  - 本の情報:
- 

- タイトル: Piktors Verwandlungen
- 著者: Hermann Hesse
- 内容: あるもの変身に関する「童話」。この話の元に自分のギターに名前を付けた。

本の情報: ヘルマン・ヘッセ全集〈9〉メールヒェン・物語集  
7(1919-1936)

---

- タイトル: 『パパラギ』パパラギ—はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集
- 著者: エーリッヒ・ショイルマン
- 内容: パパラギ はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集

- 混迷の時代にこそ必要とされる不朽の叡智現代社会に警鐘を鳴らす歴史的名著。南海の酋長ツイアビは、はじめてパラギ(=白人)たちの「文明社会」に触れた驚きを、島の人々に語って聞かせる。
  - お金、時間、都会、機械、情報、物欲……。
  - その内容は、深い洞察と知恵、素朴にして痛烈な啓示に満ちた文明批評として、今なお輝きを失っていない。
  - 豊かさを追い求めてモノと時間を切り刻み、無辺の闇にたどり着いてしまった私たちが、今こそ真摯に受け止めるべきメッセージ。
  - 出版社: 立風書
  - ISBN-10: 4651930077
  - 発売日: 1981/01
- 
- タイトル: モモ
  - 著者: ミヒヤエル・エンデ
  - 内容: モモ—時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にかえしてくれた女の子のふしぎな物語
  - 出版社: 岩波書店
  - ISBN-10: 4001106876
  - 発売日: 1976/9/24
- 
- タイトル: Zen in der Kunst des Bogenschiessens
  - 著者: Eugen Herrigel

- 内容：ドイツ人が日本で弓の修業を通して学んだ事
  - 日本語版：日本の弓術
  - 発売日：
- 

- タイトル： Mein Name sei Gantenbein
  - 著者： Max Frisch
  - 内容： 盲人になった真似をしている人が社会を観察している話
  - 出版社：
  - ISBN-10:
  - 発売日：
- 

- タイトル： The Hand - How its use shapes the brain, language, and human culture
- 著者： Frank R. Wilson
- 内容： 手の五〇〇万年史 手と脳と言語はいかに結びついたか
- 神経科医として、手を痛めた音楽家の治療に当たっていた著者は、力強くも繊細で様々な仕事をこなす「ヒトの手」について知りたいという欲求を抱いた。本書は、その欲求から始まった研究をまとめたものだ。
- 人類学的、生体力学的な視点からのヒトの手の説明もある。しかし本書の中心は、成長や学習の視点から見たヒトの「手」の分析だ。音楽家、あやつり人形遣い、ロッククライマー、プロの料理人など、手に技能を持つ

人々に著者が行ったインタビューを読むと、脳が手を使役しているのではなく、両者が双発的に創造性を発達させていることがよく分かる。

- このことから著者は、手が子供の教育に果たす役割の重要性を強調する。学習は、ヒトの最も重要な「道具」であり、生涯にわたってこの道具を使うために、脳に対する教育と、手の教育の両立を著者は提案している。
  - 出版社: Vintage Books
  - ISBN-10: 4794806671
  - 発売日: New York, 1998
- 
- タイトル: 手の不思議
  - 著者: 一色八郎
  - 内容: 手の発達、使い方に関する短編集
  - 出版社: PHP 文庫
  - ISBN-10:
  - 発売日: 1993
- 
- タイトル: Bushido
  - 著者: Inazo Nitobe
  - 内容: 日本の武士道に拘わる概念
  - 出版社:

- ISBN-10:

- 発売日:

---

- タイトル: Who Standard Acupuncture Point Locations in the Western Pacific Region

- 著者: WHO

- 内容: 経穴の標準位置

- 出版社: World Health Organization

- ISBN-10: 929061383

- 発売日: 2008/6/25

---

- タイトル: Japanese-English Dictionary of Oriental Medicine

- 著者: Jong-Chol Cyong M.D. & Ph.D

- 内容: 東洋医学関連の和英辞典

- 出版社: ISEISHA, Oriental Medicine Research Center of the Kitasato Institute, Tokyo

- ISBN-10:

- 発売日:

---

- タイトル: Japanese Language patterns

- 著者: Anthony Alfonso

- 内容: 英語で書いてある日本語教科書

- 出版社: Center for Japanese Studies of Sophia

University, Tokyo, 1974

- ISBN-10:
- 発売日:

## 索引

|               |               |
|---------------|---------------|
| .....         | 2, 18, 27, 79 |
| 0点のテスト.....   | 35            |
| 2分のテレビ映像..... | 51            |
| 易経.....       | 30pp., 43     |
| 異端者.....      | 123           |
| 医療類似行為.....   | 124           |
| 円覚寺.....      | 69            |
| 往診専門.....     | 113           |
| 横浜.....       | 63            |
| 科学入門書.....    | 33            |
| 火花.....       | 51            |
| 過保護.....      | 58            |
| 外国語に翻訳.....   | 133           |
| 外国人見学者.....   | 134           |
| 外国旅行.....     | 22            |
| 各種保険取り扱い..... | 122           |
| 格安保険診療.....   | 122           |
| 学会.....       | 69            |
| 学校の規則.....    | 36            |
| 学校制度.....     | 37            |
| 観光ビザ.....     | 57, 82        |
| 関内駅.....      | 67            |
| 希望的観測.....    | 65            |
| 汽車.....       | 60            |
| 義務教育.....     | 37            |

|             |            |
|-------------|------------|
| 弓を引く姿勢..... | 51         |
| 弓道.....     | 51, 68, 79 |
| 弓矢.....     | 79         |
| 求道.....     | 79         |
| 居酒屋.....    | 67         |
| 競争.....     | 28, 36, 45 |
| 教頭先生.....   | 34         |
| 軍隊.....     | 54         |
| 刑務所.....    | 55         |
| 結核療養所.....  | 103        |
| 結婚.....     | 91         |
| 建材屋.....    | 58         |
| 権威承認障害..... | 19         |
| 見学希望者.....  | 69         |
| 古代哲学書.....  | 43         |
| 故郷.....     | 19, 46     |
| キール.....    | 7          |
| 攻撃.....     | 45         |
| 高校.....     | 37         |
| 合格通知書.....  | 94         |
| 合気道.....    | 28p.       |
| 合気道連盟.....  | 29         |
| 豪華客船.....   | 63         |
| 国境.....     | 22, 60     |
| 国境警備隊.....  | 60         |
| 国境警備隊員..... | 22         |
| 国語辞典.....   | 29         |

|             |               |
|-------------|---------------|
| 黒帯.....     | 46            |
| 鎖国時代.....   | 134           |
| 裁判.....     | 55            |
| 山賊.....     | 20            |
| 思春期.....    | 31            |
| 指圧専門学校..... | 94            |
| 紙切り細工.....  | 64            |
| 治療者.....    | 27            |
| 治療雰囲気.....  | 116           |
| 自己認識.....   | 43            |
| 自己認識.....   | 111           |
| 自転車.....    | 20            |
| 社会現場.....   | 55            |
| 社会福祉.....   | 55, 58        |
| 手に職.....    | 58            |
| 手の仕事.....   | 8p., 30, 86p. |
| 手渡.....     | 110           |
| 酋長.....     | 48            |
| 集合住宅.....   | 48            |
| 住職.....     | 69            |
| 柔道.....     | 27, 50        |
| 銃刀法.....    | 21            |
| 術後疼痛.....   | 109           |
| 召命.....     | 77, 102       |
| 小遣い.....    | 56            |
| 証人.....     | 55            |
| 情報量.....    | 49            |

|                 |             |
|-----------------|-------------|
| 植芝盛平.....       | 44          |
| 職人.....         | 8p., 86, 88 |
| 心構え.....        | 79          |
| 新宿鍼灸柔整専門学校..... | 95          |
| 真名瀬漁港.....      | 6           |
| 神奈川県立武道館.....   | 76          |
| 親.....          | 58          |
| 親孝行.....        | 42          |
| 進学.....         | 37          |
| 須原耕雲.....       | 54, 69      |
| 世界一周.....       | 56          |
| 成功した人.....      | 42          |
| 成績.....         | 29, 35      |
| 西ベルリン.....      | 60          |
| 先進国首脳会議.....    | 67          |
| 先入観.....        | 65          |
| 千葉沖.....        | 64          |
| 専攻科目.....       | 39          |
| 専門学校.....       | 69          |
| 川原 群大.....      | 97          |
| 戦わない精神.....     | 36          |
| 戦闘.....         | 45          |
| 船酔い.....        | 64          |
| 全日本弓道連盟.....    | 68          |
| 全日本鍼灸学会.....    | 69          |
| 禅.....          | 45          |
| 卒業.....         | 33, 37      |

|             |        |
|-------------|--------|
| 太極拳.....    | 50     |
| 退学.....     | 35, 40 |
| 代田文誌.....   | 134    |
| 大人.....     | 42     |
| 第一審.....    | 55     |
| 脱線.....     | 97     |
| 脱走兵.....    | 55     |
| 脱落者.....    | 42     |
| 谷川先生.....   | 76     |
| 知的財産.....   | 133    |
| 知的刺激.....   | 43     |
| 茶道.....     | 85     |
| 中学校.....    | 33, 37 |
| 中国古代哲学..... | 30     |
| 著作権.....    | 134    |
| 徴兵を拒否.....  | 54     |
| 爪.....      | 26     |
| 哲学関連書籍..... | 43     |
| 天職.....     | 77, 87 |
| 天文学.....    | 34     |
| 伝統中医学.....  | 135    |
| 電子ブック版..... | 134    |
| 土曜会.....    | 104    |
| 東南アジア.....  | 57     |
| 東洋医学.....   |        |
| 伝統中医学.....  | 135    |
| 鍼灸界.....    | 1      |

|             |                 |
|-------------|-----------------|
| 動機.....     | 95              |
| 道筋.....     | 45              |
| 道場.....     | 51              |
| 得気.....     | 133             |
| 内弟子.....    | 68              |
| 二日酔い.....   | 25              |
| 日出づる国.....  | 65              |
| 日本茶.....    | 85              |
| 日本鍼灸師会..... | 69              |
| 入国管理局.....  | 82              |
| 派閥.....     | 106             |
| 梅雨.....     | 64              |
| 白石先生.....   | 97              |
| 判子.....     | 110             |
| 反撃.....     | 45              |
| 反抗心.....    | 33              |
| 反抗的な態度..... | 17              |
| 非社会的行為..... | 17              |
| 不潔恐怖症.....  | 80              |
| 不信感.....    | 48              |
| 富士山.....    | 64              |
| 武道.....     | 8p., 28, 31, 76 |
| 武道館.....    | 76              |
| 副専攻.....    | 39              |
| 福祉施設.....   | 55              |
| 福祉大国.....   | 58              |
| 仏教.....     | 20, 45          |

|               |            |
|---------------|------------|
| 文学.....       | 18, 30, 34 |
| 片道切符.....     | 58p.       |
| 勉強会.....      | 35, 97     |
| 補欠入学.....     | 95         |
| 母国.....       | 19         |
| 報酬.....       | 47         |
| 奉仕.....       | 55         |
| 冒険.....       | 20         |
| 冒険野郎団.....    | 20         |
| 北海道.....      | 63         |
| 北鎌倉.....      | 69         |
| 本州.....       | 63         |
| 翻訳.....       | 113        |
| 未知の世界.....    | 59         |
| 門前払い.....     | 69         |
| 葉山町.....      | 6, 117     |
| 理学療法専門学校..... | 95         |
| 理想主義.....     | 95         |
| 留年.....       | 39         |
| 旅行保健.....     | 59         |
| 良心的徴兵忌避者..... | 37, 54     |
| 臨時職員.....     | 113        |
| 浪越.....       | 94         |
| 鍼灸界.....      | 1p., 9     |
| 鍼灸師会.....     | 8, 69, 137 |
| 鍼灸道.....      | 77, 113    |
| 鍼麻醉.....      | 109        |

|                              |         |
|------------------------------|---------|
| 閻魔堂.....                     | 74      |
| 閻魔道場.....                    | 74      |
| Arbeit.....                  | 29, 102 |
| authority problem.....       | 19      |
| Beruf.....                   | 77, 102 |
| Berufung.....                | 102     |
| Buddha.....                  | 41      |
| Cinzano.....                 | 24      |
| common sense.....            | 41      |
| de qi.....                   | 133     |
| fair play.....               | 45      |
| fisherman's shirt1.....      | 6       |
| Geselle.....                 | 103     |
| Handwerk.....                | 8       |
| Hermann Hesse.....           | 49      |
| Herrigel.....                | 53      |
| Hesse.....                   | 49      |
| Hinaishin.....               | 133     |
| Hongkong.....                | 83      |
| identity.....                | 111     |
| International Symposium..... | 137     |
| iphone.....                  | 22      |
| Khabarovsk.....              | 62      |
| land of the rising sun.....  | 65      |
| Meister.....                 | 8       |
| Nakhodka.....                | 61      |
| numerus clausus.....         | 39      |
| Pfadfindermesser.....        | 21      |
| Philosophie Chinas.....      | 43      |
| Richard Wilhelm.....         | 43      |
| Siddharta.....               | 49      |
| TCM.....                     | 135     |

|               |        |
|---------------|--------|
| アパート契約.....   | 114    |
| アルバイト.....    | 29     |
| アルプス.....     | 23     |
| インターン.....    | 108    |
| インドの古典.....   | 43     |
| ヴェーダ.....     | 43     |
| カーテンレール.....  | 115    |
| カンニング.....    | 35     |
| キール市.....     | 7, 15  |
| クラシックギター..... | 25     |
| ケチ.....       | 116    |
| サミット.....     | 67     |
| サンフランシスコ..... | 57     |
| シベリア鉄道.....   | 57, 61 |
| しゃべり過ぎ.....   | 119    |
| スポーツ.....     | 45     |
| タバコ.....      | 17     |
| テレビ.....      | 50     |
| テレビ番組.....    | 51     |
| テント.....      | 20     |
| ドイツ語.....     | 29     |
| ドキュメンタリー..... | 50     |
| ドラマ.....      | 108    |
| トレーナー.....    | 47     |
| ナイフ.....      | 21     |
| ナホトカ.....     | 62     |
| パスポート.....    | 60     |

|                     |        |
|---------------------|--------|
| バックグラウンドミュージック..... | 116    |
| パパラギ.....           | 47     |
| ハバロフスク.....         | 62     |
| パリ.....             | 51     |
| ハンブルグ.....          | 51     |
| ヒーリング.....          | 120    |
| ビザ.....             | 61     |
| ヒッチハイク.....         | 23     |
| プライド.....           | 35     |
| フランス語.....          | 39     |
| ヘリゲル.....           | 53, 77 |
| ボーイスカウト.....        | 20     |
| モスクワ.....           | 60     |
| ユースホステル.....        | 67     |
| リラグゼーション.....       | 120    |



図 39: 梅の花

---